ペテロ#37

群れを牧し、悪魔に抵抗する
第一ペテロ 5 章 1-14 節
ペテロの書簡シリーズ #37
ロバート・D・ルギンビル博士 著
https://ichthys.com/Pet37.htm
からの翻訳

第一段落(1-4 節)

(1) そこで私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じ長老として、またキリストの苦難の証人として、さらには、まもなく現される栄光を[あなたがたと共に]分かち合う者として勧める。(2) あなたがたにゆだねられている神の群れを牧しなさい。強いられてではなく、神の御心に従って自ら進んで監督しなさい。恥ずべき利益を得ようとしてではなく、心からの熱意をもってそうしなさい。(3) [あなたがたに]ゆだねられた人々に対して権威を振りかざすのではなく、群れの真の模範となりなさい。(4) そうすれば、大牧者が現れるとき、あなたがたは決してしぼむことのない栄光の冠を、勝利の報いとして受けるであろう。(第一ペテロ 5 章 1-4 節)

長老たち(1 節):

そこで私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じ長老として、またキリストの苦難の証人として、さらには、まもなく現される栄光を[あなたがたと共に]分かち合う者として勧める……。(第一ペテロ 5 章 1 節)

「長老」という言葉は、ギリシヤ語の presbyteros(プレスビュテロス)で、文字どおりには「年老いた男性」を意味します(長老たちによる会議体を通して教会を統治するという教派の制度から、「Presbyterian(長老派)」という名称が生まれました)。しかし、地域教会においては、単に「年老いた男性」であるというだけでは、その教会の運営に携わる資格があるとは言えません。「長老」という職務については、適切な審査を経た後、資格を満たした男性がその役割に任命されます(第一テモテ 3 章 2-7 節, 5 章 17 節; テトス 1 章 5-9 節)。[1]

---

[1] 「聖書の基礎第 6 部 B:教会論」II.C.b.「牧師・教師と長老」を参照してください。

ペテロは、自分が使徒であることを読者に思い起こさせるのではなく、自分と彼らに共通する「長老」という立場に基づいて、この書簡を受け取る諸教会の指導者たちに訴えかけています。そうすることで、ペテロは彼らに自分自身との比較を促しているのです。一方では、ペテロも彼らと同じように、主から世話を任された羊たちに対する責任を果たす義務を負っているのであり、その点で彼らより「優れている」わけではありません。しかし他方では、このことは、彼らがペテロとその「職務の遂行ぶり」を比較することによって、自分たちがどれほど効果的に務めを果たしているかを判断できるということでもあります。そして、間違いなく多くの者は、ペテロの水準には達していなかったことでしょう。ペテロは、自分も彼らと同じ長老であると述べることによって、一部の者たちが、自分たちの働きの実績が比較的乏しいことを正当化するためにしがみついていたかもしれない言い訳を取り除いているのです。つまり、ペテロは使徒なのだから、その働きが自分たちより優れているのは「当然だ」という理屈です。しかし、使徒職の賜物によってペテロにはすべての教会に対する特別な権威が与えられていたものの（今日では、もはやそのような権威を持つ個人は存在しません）、彼に与えられた職務の実際の内容は、彼が手紙を書き送っていた長老たちの職務とまったく同じ性質のものでした。彼らの場合はそれぞれの地域教会で、ペテロの場合は諸教会全体にわたってという違いはありましたが、全員がキリストの群れを牧する責任を負っていたのです。

「長老の複数制」、すなわち、教会には長老が一人だけいるべきなのか、複数の長老がいるべきなのか、それとも複数の長老の中に一人の責任者を置くべきなのかという問題については、聖書が意図的に明確にしていない事柄を解決しようとして、これまであまりにも多くの議論が重ねられてきました。小さな集まりであれば、教える働きを担う長老が一人いれば十分かもしれません。教会が成長し、その長老を助けるためにほかの人々が長老として任命されたとしても、より優れた教師が現れない限り、教える働きは引き続きその長老が担うことになるでしょう。少なくとも、全体集会において会衆を教える中心的な役割は、彼が担い続けることになります。また、教会がすべての長老に「平等な投票権」を与えることを決めたとしても、どのような集団においても、結局は必ず誰か一人が「同等の者たちの中の第一人者」となります。真の聖書的権威はすべて、神の御言葉の真理を教えることから生じるのですから、そのような集団に優れた教師がいれば、ほかの人々が自然とその人の判断に従うようになるでしょう。そして、もしそうしなければ、良い結果は生まれません。聖書を正しく教えている教会でさえ、時として分裂してしまうのは、このような理由によるのです。

彼らは私たちの中から出て行った。しかし、彼らは私たちに属する者ではなかった。もし私たちに属する者であったなら、私たちと共にとどまっていたはずで

ある。しかし、彼らが出て行ったのは、彼らのうちの誰一人として私たちに属する者ではないことが明らかにされるためであった。（第一ヨハネ 2 章 19 節 /NKJV 訳）

この箇所におけるペテロの言葉、そしてこれから彼が述べようとしていることから私たちが理解できるのは、長老の職務に任命された人は誰であれ、決して軽く考えてはならない重大な責任を引き受けたということです。地域教会の人々に真理を教える責任を負う長老の務めは、その権威の及ぶ範囲が一つの地域教会に限られているとはいえ、教会全体に対する使徒の務めに匹敵するほど重要なものです。ですから、「教える長老」（このような長老がいなければ、真の地域教会は成り立ちません）であれば、できる限り最善を尽くして教えるべきですし、運営を担当する長老であれば、ほかの長老たちと共に、できる限り最善を尽くして会衆を治めるべきです。ペテロが前の章で述べているとおりです。

(10) [私たち]一人ひとりは、それぞれ[特定の霊的な]賜物を受けているのだから、神の多様な恵みの良い管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合おう。(11) 語る者がいるなら、神から直接与えられた言葉を語るかのように語りなさい。奉仕する者がいるなら、神が備えてくださる力によって奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神がほめたたえられるためである。栄光と力が、世々限りなくキリストにあるように。アーメン。（第一ペテロ 4 章 10-11 節）

したがって、この文脈において、次の原則を指摘しないわけにはいきません。すなわち、すべてのクリスチャンには、与えられた奉仕の務めを勤勉に果たす責任が主に対してあるという原則です。これは、その人が長老であるか、執事であるか、あるいは地域教会で何らかの「公式な」役職に就いているかどうかにかかわらず、すべての人に当てはまります。私たちは皆、同じ一つの体、すなわちキリストの体の一部です。そして、その体を構成する一人ひとりが、主に仕えるように自分の務めを果たしているときにのみ、私たちは一つの体として健全に成長することができるのです。私たちは皆、主に対して責任を負っています。そして、私たちが受ける評価と報いは、どのような役職に就いていたかによってではなく、主と主の教会のために実際に何を成し遂げたかに基づいて決められるのです（エペソ 4 章 11-16 節; コロサイ 2 章 19 節）。

(9) だから、善[すなわち神の働き]を行うことに疲れ果ててはならない。あきらめずに続けるなら、[定められた]時に[報いを]刈り取ることになるからである。(10) それゆえ、機会がある限り、すべての人に対して、特に信仰の家族に対

して、善[すなわち神の働き]を行い続けよう。(ガラテヤ 6 章 9-10 節)

キリストの苦難の証人(1 節):

そこで私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じ長老として、またキリストの苦難の証人として、さらには、まもなく現される栄光を[あなたがたと共に]分かち合う者として勧める……。(第一ペテロ 5 章 1 節)

ペテロは、自分の手紙を読む地域教会の指導者たちに、引き続き立派に務めを果たすよう勧めるにあたり、使徒としての権威を持ち出すのではなく、キリストの苦難を目撃した証人であることに基づいて、これらの長老たちに訴えかけています。霊感によって導かれたこのような語り方は、彼らの注意を、そして私たちの注意をも、本来向けるべきところ、すなわち、私たちがその牧者であり羊でもある、愛する主であり救い主である方へと向けさせます。私たちが地上でどのような権威を持っていようとも、また、どのような義務や責任を負っていようとも、私たちの存在も、私たちが持っているものも、将来持ちたいと望むものも、なりたいと望むものも、すべては、私たちの岩である、愛する主であり救い主イエス・キリストの犠牲の上に成り立っているのです。

ペテロは、四つの福音書に詳しく記されている三年半の宣教活動に至る前の、主が経験しなければならなかったあらゆる苦難と犠牲を伴う、主の生涯の初期の頃を目撃したわけではありません。[2] ペテロが主から召されたのは、その宣教活動が始まってからのことでした(マタイ 4 章 21-22 節)。しかしペテロは、その三年半の間に主が経験された困難や、主が直面された反対を目撃しました。そして何よりも、十字架に至るまでに主が耐え抜かなければならなかった一連の過酷な試練を目撃したのです。主は不当に逮捕され、告発され、有罪判決を受け、裏切られ、見捨てられ、否認され(ペテロ自身によって三度も)、殴られ、鞭打たれ、その顔は人間の面影をとどめないほどに損なわれ(イザヤ 52 章 14 節)、異邦人の手に引き渡されて虐待され、ご自分の十字架を背負って死の丘まで運ばされ、十字架につけられ、ご自分に属するすべてのものを失うのを目の当たりにさせられ、まさにその人々のために死のうとしておられた者たちから、十字架から降りてみろと嘲られ、罵られたのです。ペテロはこれらすべての証人でした。そして、彼が自分の権威の根拠として訴えているのは、これらの苦難なのです。なぜなら、そのような権威はすべてイエス・キリストから来ているからです。しかし、ペテロが目撃しなかったもの、誰も見ることのできなかったもの、そして今日の私たちで

---

[2] 「聖書の基礎 第 4 部 A:キリスト論」I.5.g.「幼少期の生活と宣教への備え」<リンク先ファイルの 96 頁-/あるいは A4 版印刷本「聖書の基礎 第四部 A:キリスト論」の 94 頁->を参照下さい。

さえ、まだほんのわずかしか理解できていないものがあります。それは、キリストの究極の苦難、すなわち、全世界の罪のために暗闇の中で遂げられた主の死です。それは、主がすべての罪に対する刑罰を支払い、救いを可能にしてくださった「キリストの血」のことです。[3]　これ以上に偉大な、訴えの根拠となるものはありません。なぜなら、私たちの救いも、私たちが持っているすべてのものも、その犠牲にかかっているからです。

> (9) 神は、私たちが御怒りを受けるように定められたのではなく、私たちの主イエス・キリストを通して救いを受けるように定められたのである。(10) キリストが私たちのために死なれたのは、私たちが目覚めていても眠っていても、キリストと共に生きるためである。(第一テサロニケ 5 章 9-10 節 /NIV 訳)

ペテロとは違って、私たちは、主の宣教活動中の苦難も、裁判と十字架刑という試練の中で主が受けられた虐待も、実際に目撃したわけではありません。しかし、ペテロと同じように、私たちも、神の御言葉の真理と、その真理を私たちに理解させてくださる御霊の働きを通して、これらすべてのことについて多くを知り、その意味を深く理解することができます。また、主が私たちの罪のために死なれることによって払ってくださった究極の犠牲についても、ある程度理解することができます。そのような意味で、私たちは皆、主の「証人」であり、主の真理と主の御国の「証人」なのです。

> 「わたしについて証しする別の方がおられる。そして、わたしは、その方がわたしについてなさる証しが真実であることを知っている。」(ヨハネ 5 章 32 節 /NKJV 訳)

> 「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤ全土とサマリヤ、さらに地の果てに至るまで、わたしの証人となるであろう。」(使徒行伝 1 章 8 節 /NKJV 訳)

まもなく現される栄光(1 節):

> そこで私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じ長老として、またキリストの苦難の証人として、さらには、まもなく現される栄光を[あなたがたと共に]分かち合う者として勧める……。(第一ペテロ 5 章 1 節)

---

[3] 「聖書の基礎 第 4 部 A:キリスト論」II.4.「キリストの血」<リンク先ファイルの 224 頁-参照下さい/あるいは A4 版印刷本「聖書の基礎 第四部 A:キリスト論」の 222 頁->を参照下さい。

これまでにも見てきたように（最近では第一ペテロ 4 章 14 節の解説において）、私たちがあずかるこの「まもなく現される栄光」とは、復活の際に私たちが栄光を受けることを指しています。そのとき、私たちは完全な永遠の体を受け、その少し後には、この世において主に対して行った真の奉仕（霊的成長、前進、実り）の質と量に応じて、永遠に私たちのものとなる報いを受けることになります。この復活と報い、すなわち私たちの「栄光化」こそが、永遠にわたって神に栄光を帰することになるのです。

(28) そして、神を愛する者たち、すなわち、神のご計画に従って召された者たちのために、神がすべてのことを共に働かせて益としてくださることを、私たちは知っている。(29) なぜなら、神はあらかじめ知っておられた者たちを、御子の姿に似た者となるように、あらかじめ定められた（すなわち、あらかじめそのように決められた）からである。それは、御子が多くの兄弟[姉妹]たちの中で長子となられるためであった。(30) そして、神はあらかじめ定められた者たち（すなわち、あらかじめそのように決められた者たち）を、さらに[救いへと]召し、召された者たちを義とされ（すなわち、キリストへの信仰によって義とされ）、義とされた者たちに、さらに**栄光をお与えになった**（すなわち、私たちの将来の復活と永遠の命）。（ローマ 8 章 28-30 節）

(13) [キリスト]にあって、あなたがたもまた、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救いの良い知らせを聞き、[私が言うには]この方を信じたとき、約束の御霊、すなわち聖なる[御霊]によって証印を押された。(14) この御霊は、私たちの受け継ぐべきものが贖われ、確実に保たれるための保証（すなわち、私たちの復活と報いがあらゆる面で確実に守られることの保証）であり、それは[永遠において]神の栄光がほめたたえられるためである。（エペソ 1 章 13-14 節）

神は、私たちに栄光をお与えになることによって、ご自身の栄光を現されます。つまり、神が本来備えておられる栄光に満ちたご性質は、永遠の輝かしい光にふさわしい完全な永遠の体を私たちに授け、さらに、神の栄光を永遠に映し出す冠やその他の報いで私たちを飾ってくださることによって、明らかにされるのです。この栄光、すなわち神の永遠の栄光にあずかることは、想像し得る限り最も素晴らしいことです（第二ペテロ 1 章 4 節参照）。そのため、私たちは皆、復活して共に引き上げられ、神の栄光を直接目の当たりにし、二度とその栄光に満ちた御前を離れることのない日を、最大の期待をもって待ち望んでいるのです。

(18) なぜなら、現在のこれらの苦難は、[再臨の時に]私たちのために**現される**ことになっている**栄光**とは、到底比べものにならないと私は考えるからである。

(19) 被造物全体は、神の子たちが現されることを切に待ち望んでいる。(20) なぜなら、被造世界は今、虚無に服しているからである。それは自ら望んだことではなく、[アダムの罪の結果として]それを虚無に服させた方によるものである。しかし、希望がないわけではない。(21) なぜなら、[再臨の時に]被造世界も、神の子たちの**栄光に満ちた解放**(すなわち、私たちの復活)の際に、朽ち果てることへの隷属から解放されるからである。(ローマ 8 章 18-21 節)

しかし、あなたがたの信仰は、人生というるつぼの中で試されて本物であることが証明されるとき、イエス・キリストが現れる時(すなわち、再臨の時)に、あなたがたに称賛と栄光と誉れをもたらすことになる。(第一ペテロ 1 章 7 節)

群れを牧しなさい(2 節):

(2) ……あなたがたにゆだねられている神の群れを牧しなさい。強いられてではなく、神の御心に従って自ら進んで監督しなさい。恥ずべき利益を得ようとしてではなく、心からの熱意をもってそうしなさい……。(第一ペテロ 5 章 2 節)

この命令についてまず注目すべきことは、キリストの体に仕えるために私たちに与えられた責任を果たすことは、してもしなくてもよいというものではないということです。正しく生きるクリスチャン生活は、真剣に取り組むべきものです。主の教会に対して私たちにゆだねられた責任を果たすことは、「時間ができて、できそうならやる」というようなものであってはなりません。少なくとも、そうあるべきではありません。イエスがこれほど重要なことを私たちにゆだねてくださったのであれば、当然、それを人生の最優先事項の一つとすべきです。これは、イエス・キリストが割り当てられるすべての奉仕の務めについて言えることです。そして、それらを割り当てられるのは主ご自身なのです(第一コリント 12 章 4-6 節)。何らかの奉仕の務めを与えられる段階にまで霊的に前進した信者は皆、「時が良くても悪くても」、その務めを続けるべきです。特に、神の御言葉を教えることが含まれている場合には、なおさらです。

御言葉を宣べ伝えなさい。状況が良くても悪くても、絶えずその務めに励みなさい。あらゆる忍耐をもって教えながら、誤りを正し、戒め、[そして]励ましなさい。(第二テモテ 4 章 2 節)

上の聖句が示唆しているように、牧師・教師が自分にゆだねられた群れに対して権威を行使し、「群れを牧する」のは、主として神の御言葉を教えることを通してです。ほとんどの牧師の職務には、教会運営上の責任もある程度含まれるでしょう。しかし、そ

の負担の大部分は、教える務めを担わない長老、執事、その他の会衆の成員（どのような役職名で呼ばれていようとも）が担うべきです。そうすることで、牧師・教師が自分の主要な務めを果たすために十分な時間と力を確保できるようになるのです。神の御言葉が教えられなければ、誰であっても霊的に成長し、前進し、実を結ぶことはできません。

> あなたがたを指導する者たちに従い、服従しなさい。彼らは、やがて申し開きをしなければならない者として、あなたがたの魂を見守っているからである。彼らが嘆きながらではなく、喜びをもってその務めを果たせるようにしなさい。嘆きながら務めを果たすことになれば、それはあなたがたにとって益とならないからである。（ヘブル 13 章 17 節 /NKJV 訳）

聖書が牧者と羊の群れのたとえを用いているのには、十分な理由があります。良い羊飼いは、常に自分の羊たちの真の幸福を心にかけています。羊たちを狼から守り、豊かな牧草と十分な良い水が得られるようにします（神の御言葉の実質的な教えと、そこから得られる励ましを意味します。詩篇 23 篇 1-4 節）。また、偽教師や偽りの教えから羊たちを守り、決して羊たちを食い物にすることはありません。賢明な羊たちは、羊飼いが自分たちの最善の益を心にかけていることを理解し、「その声を聞いて」、ふさわしく応じるでしょう（ヨハネ 10 章 1 節以下参照）。羊飼いの声とは、彼が教える教えのことです。そして、その教えを通して、羊飼いは一方では自分の権威を確立し、他方では羊たちに益をもたらすのです。

牧会が主として教えることを通して行われるのと同じように、牧師・教師の権威に従うことも、主としてその教えを聞き、信じ、実践することを通して行われます。多くの牧師たちが、教会員の数を増やすこと、音楽プログラム、金銭、建物、会衆への個別訪問など、比較的重要性の低い、あるいは方向性を誤った事柄に集中することによって道を踏み外してしまいます。その結果、本当に重要なことに費やす時間がほとんどなくなるばかりか、教会が本来向けるべき関心もゆがめられてしまうのです。同じように、教会員が律法主義的な「責任を果たしているかどうかを互いに監視し合う」仕組みに巻き込まれるような教会も、決して繁栄することはありません。なぜなら、真の霊的成長は、真理に従うことによって内側から外側へと生じなければならず、会衆の行動を表面的に取り繕うような偽善的な制度によって、外側から押しつけることは決してできないからです。

したがって、この節にある「監督する」（ギリシヤ語の episkopeo〈エピスコペオー〉に由来し、「監督」を意味する episkopos〈エピスコポス〉もこの語から派生しています）と

いう言葉は、教会組織の牧師が会衆の私生活に干渉し、何を考えるべきか、何をすべきか、また何をしてはならないかを指図し、個人的に介入することによって彼らの行動の細部まで規制することだと理解すべきではありません。カルトはそのようなことをします。極端に律法主義的な教会もしばしばそのようなことをします。しかし、聖書にかなった方法は、その役割を聖書そのものに果たさせることです。キリストが私たちに何を考え、何を語り、何を行うことを望んでおられるかは、すべて聖書の中に記されています。真理を深く詳細に教える教会は、やがて、クリスチャンとしての正しい行動のあらゆる面を教えることになるでしょう。それだけでなく、信者が霊的に健全に成長し、主のために良い実を結ぶために必要な、その他すべての事柄も教えることになります。この過程が正しく機能するためには、信者は真理、すなわち内容を伴って実際に教えられる真理を聞くことができなければなりません。そして、その真理について考え、真剣に向き合い、それを信じ、受け入れ、自分自身の心の内で実践しなければならないのです。

良い牧師は、会衆に必要なすべての真理を提供することによって、自分にゆだねられた会衆を「監督する」のです（一部の教派の「監督」のように、ほかの教会まで監督するのではありません）。それは、特定の罪や外部からの特定の脅威について警告するだけでなく、聖書に含まれている真理の全領域を教えることを意味します。良い牧師は、自分の群れにとって最善のものを心から願っています。そして、それを群れに与えることのできる唯一の方法は、真理を提供することなのです。それによって、羊たちは霊的に成長し、この世で私たちに降りかかる試練を乗り越えるための備えを整え、霊的成熟に達し、さらにその先へと前進することができます。そして、この世で主の御心を行うことを願うすべての人に主が割り当ててくださる奉仕の務めに携わることによって、彼ら自身も主のために良い実を結ぶようになるのです。それこそが、真の「監督者」、すなわち群れを監督する者の姿です。つまり、主イエスが実際に望んでおられる方法で、主の羊たちのうち、自分にゆだねられた小さな群れを世話する人のことなのです。

強いられてではなく、自ら進んで（2 節）：

> (2) ……あなたがたにゆだねられている神の群れを牧しなさい。強いられてではなく、神の御心に従って自ら進んで監督しなさい。恥ずべき利益を得ようとしてではなく、心からの熱意をもってそうしなさい……。（第一ペテロ 5 章 2 節）

心の態度は重要です。動機も重要です。ですから、牧師には、ある日の心の態度が必ずしも良くなくても、また、その日の動機が本来あるべきほど純粋でなくても、自分の群れに霊的な食物を与える責任があることは確かですが、悪い態度をいつまでも放置

して心の中で悪化させたり、誤った動機が心に根を下ろすのを許したりしても、何も良い結果は生まれません。世俗の世界では、責任ある立場に伴うさまざまな重圧によって、かつては「夢の仕事」だったかもしれない職務に、その職に就いている人が嫌気をさすようになることは珍しくありません。どのような状況であっても、そこに伴う困難や不愉快なことによって、その状況に対する自分の態度が支配されてしまうことは、ほとんどすべての人に共通する傾向です。たとえ、それがほかの面では、以前から長い間望み、熱心に追い求めてきたものであったとしても、そうなってしまうことがあるのです。これは、世間的に最も恵まれている職業や専門職に就いている人々にさえ当てはまります（不平をこぼす有名人やスポーツ選手などが思い浮かびます）。そして、この危険な職業上の落とし穴を避けるよう注意しなければ、牧師たち（また教会でほかの役職に就いている人々）にも同じことが起こり得るのです。

このことについて、聖書の中でおそらく最もよく知られている例は、モーセが自分にゆだねられた民にいら立ち、命じられたとおりに岩に語りかける代わりに、岩を打ってしまったこと（民数記 20 章 8-13 節）、またエリヤが、主は実際には「バアルに膝をかがめなかった」七千人を残しておられたにもかかわらず、イスラエルには自分一人しか残っていないと主に訴えたことです（列王記上 19 章 14-18 節）。群れが手に負えなくなり、その群れを牧する務めが重荷となって、果たすことが不可能にさえ思えるようになると、牧師・教師が自分にゆだねられた人々にいら立ち、彼らの「恩知らずな態度」に苦々しい思いを抱くようになるのも理解できます。しかし、それは、私たちが仕えている相手は主であるということを忘れているのです。これは、あらゆる奉仕の務めに当てはまります。私たちが奉仕する相手が従順であろうと反抗的であろうと、感謝していようと感謝していなかろうと、実際、ほかのどのような事情があろうとも、それにかかわらず、私たちには**主のために**自分の務めを立派に果たす責任があるのです。

> (23) 何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心を込めて行いなさい。(24) あなたがたは、主から相続の報いを受けることを知っているからである。あなたがたが仕えているのは、主キリストなのである。（コロサイ 3 章 23-24 節 /NKJV 訳）

利益を求めるのではなく、心からの熱意をもって（2 節）：

> (2) ……あなたがたにゆだねられている神の群れを牧しなさい。強いられてではなく、神の御心に従って自ら進んで監督しなさい。恥ずべき利益を得ようとしてではなく、心からの熱意をもってそうしなさい……。（第一ペテロ 5 章 2 節）

聖書が明確に教えているように、金銭を愛することは「あらゆる悪の根[本的原因]」です(第一テモテ 6 章 10 節)。したがって、それは主の真の羊飼いたちが自分の務めを果たす動機としては、まったくふさわしくないものです。イスラエルの群れを牧し、真理によって彼らを養うべきであったパリサイ人たちは、自分たちの基本的な責任を果たすことにはほとんど関心がありませんでしたが(マタイ 23 章 1-36 節; マルコ 12 章 38-40 節; ルカ 20 章 45-47 節; エゼキエル 34 章 1-31 節参照)、金銭には非常に強い関心を持っていました(ルカ 16 章 14 節; マルコ 7 章 9-13 節参照)。

(7) 自分の費用で兵役に就く者がいるだろうか。ぶどう園を作りながら、その実を食べない者がいるだろうか。また、羊の群れを飼いながら、その群れの乳を飲まない者がいるだろうか。(8) 私はこれらのことを、単に人間的な考えから言っているのだろうか。律法も同じことを言っているではないか。(9) モーセの律法には、「穀物を踏み砕いている牛に口輪をかけてはならない」と書かれている。神が心にかけておられるのは牛のことなのだろうか。(10) それとも、神はもっぱら私たちのためにそう言っておられるのではないだろうか。確かに、これは私たちのために書かれたのである。耕す者は望みをもって耕し、脱穀する者は、その望んでいるものにあずかる希望をもって脱穀すべきだからである。(11) 私たちがあなたがたのために霊的なものを蒔いたのであれば、あなたがたから物質的なものを刈り取ることは、それほど大きなことだろうか。(第一コリント 9 章 7-11 節 /NKJV 訳)

同じように、主は、良い知らせを宣べ伝える者たち(すなわち、真理を教える者たち)が、その働きによって生活するようにも定められた。(第一コリント 9 章 14 節)

御言葉の教えを受ける者は、教える者と、すべての良いものを分かち合いなさい。(ガラテヤ 6 章 6 節)

(17) よく指導している長老たちは、二重の尊敬を受けるにふさわしい者とされるべきである。特に、御言葉と教えることに労苦している者たちはそうである。(18) なぜなら、聖書には、「脱穀している牛に口輪をかけてはならない」、また「働く者が報酬を受けるのは当然である」と書かれているからである。(第一テモテ 5 章 17-18 節)

これらすべての聖句が明らかにしているように、自分の群れに霊的な食物を与えるという務めを果たしている牧師・教師には、その群れから生活の支援を受ける権利があ

ります。しかし、牧師・教師にぜいたくな生活を約束している聖句は一つもありません。それどころか、まったく逆です。パウロはテモテに、食べ物と着る物が十分にあれば、それで満足すべきだと告げています（第一テモテ 6 章 8 節）。会衆が自分たちの牧師を飢えさせるのは正しくありませんが、牧師が会衆を食い物にすることも正しくありません。牧師を経済的に支える目的は、牧師・教師が、会衆の霊的成長に必要な質と量の教えを準備するために、十分な時間と力を確保できるようにすることです。その水準の支援が与えられているのであれば、牧師は、自分が仕えている会衆の生活水準よりもはるかに低い、最低限の生活しかできない状態に意図的に置かれているのでない限り（それは牧師に対する敬意の欠如に当たります）、その支援に満足すべきです。そして、神の御言葉を学ぶことに関心のある人々に対して、それを教えることを専業とできる機会が与えられていることを喜ぶべきです。そのような機会は、今日では極めてまれだからです。というのも、今日、牧師を経済的に支えている会衆の大多数は、神の御言葉を正統的で内容の充実した仕方で教えられることに、まったく関心を持っていないからです。

> (19)「自分のために地上に宝を蓄えてはならない。そこでは、しみやさびがそれを損ない、盗人が押し入って盗む。(20) むしろ、自分のために天に宝を蓄えなさい。そこでは、しみもさびもそれを損なわず、盗人が押し入って盗むこともない。(21) あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからである。」（マタイ 6 章 19-21 節 /KJV 訳）

物質的な利益を熱心に求めるのではなく、牧師・教師は、すべてのクリスチャンの中でも特に、真の動機という点において、霊的成長、前進、実りに関するキリストの命令を果たすすべての信者に与えられる永遠の報いに目を向けるべきです。物質的な利益は、この世の生活においてしか役に立たず、その有用性も限られており、霊的な観点から見れば、その価値さえ疑わしいものだからです。何といっても、キリストこそ私たちの主人です。私たちが仕えているのは主なのです。そして、私たちは皆、主の御前に立ち、この世で行ったこと、あるいは行わなかったことについて申し開きをしなければならないのです。

> (10) しかし、あなたはなぜ自分の兄弟を裁くのか。また、あなたはなぜ自分の兄弟を見下すのか。私たちは皆、神の裁きの座の前に立つことになるからである。(11) 次のように書かれている。「わたしは生きている、と主は言われる。すべての膝はわたしの前にかがみ、すべての舌は神をほめたたえるであろう」（イザヤ 45 章 23 節）。(12) それゆえ、私たちは一人ひとり、自分自身について神に申し開きをすることになる。（ローマ 14 章 10-12 節）

なぜなら、私たちは皆、キリストの裁きの座の前に立たなければならないからである。それは、一人ひとりが、この体を通して成し遂げたことに応じて、それが良いものであれ、価値のないものであれ、その報いを受けるためである。(第二コリント 5 章 10 節)

群れに対して権威を振りかざさず(3 節):

……[あなたがたに]ゆだねられた人々に対して権威を振りかざすのではなく、群れの真の模範となりなさい。(第一ペテロ 5 章 3 節)

会衆の霊的成長と安全に責任を負う者として、牧師・教師にふさわしい敬意を払い、その指導に従うことは、まったく適切であり、聖書の教えにもかなっています。

(12) 兄弟たちよ、あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、戒めている人々を認めるように、私たちは勧める。(13) そして、その働きのゆえに、愛をもって彼らを非常に高く評価しなさい。互いに平和に過ごしなさい。(第一テサロニケ 5 章 12-13 節 /NKJV 訳)

あなたがたを指導する者たちに従い、服従しなさい。彼らは、やがて申し開きをしなければならない者として(すなわち、イエス・キリストの御前で)、あなたがたの魂を見守っているからである。彼らが嘆きながらではなく、喜びをもってその務めを果たせるようにしなさい。嘆きながら務めを果たすことになれば、それはあなたがたにとって益とならないからである。(ヘブル 13 章 17 節 /NKJV 訳)

特に上記の二番目の聖句が示しているように、このような愛と敬意の態度は、それを示すよう命じられている人々自身にとっても益となります。なぜなら、地域教会における調和は、すべての人に益をもたらす霊的成長を促しますが、争いや分裂はそうではないからです。もちろん、これらの命令は、問題となっている牧師・教師自身も、自分にゆだねられた人々を善良で敬虔な態度で扱い、何よりも彼らの霊的な幸福を心にかけ、権威を行使するのは、弱い者を強い者から守るため、あるいは教会の内外から入り込んでくる羊の皮をかぶった狼から会衆全体を守るために、どうしても必要な場合に限ることを前提としています。いずれにしても、何らかの矯正の言葉を語る場合、通常は、少なくとも最初の段階では、講壇からの教えの中で語られることになるでしょう。そうすることで、その戒めのメッセージは、すべての人に向けられたもの(牧師自身も含めて)であるため、誰もが客観的に受け止めることができるのです。

(24) また、彼らの間で、自分たちのうち誰が最も偉いと見なされるべきかについて、争いが起こった。(25) そこでイエスは彼らに言われた。「異邦人の王たちは人々に対して支配者として権威を振るい、人々の上に権威を行使する者たちは『恩人』と呼ばれている。(26) しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。むしろ、あなたがたのうちで最も偉い者は最も若い者のようになり、指導する者は仕える者のようになりなさい。(27) 食卓に着いている者と給仕する者とでは、どちらが偉いのか。食卓に着いている者ではないか。しかし、わたしはあなたがたの間で、仕える者のようにしている。」(ルカ 22 章 24-27 節 /NKJV 訳)

すぐ上の聖句でキリストが用いられた「支配者として権威を振るう」という表現は、ここでペテロが用いているのと同じギリシヤ語の動詞を訳したものです(この箇所では「権威を振りかざす」と訳しています)。私たちの主は、ペテロがここで述べているのと同じことを、何度も教えられました。その際、主ご自身を正しい行動の模範として示されました(また、しばしば同じ動詞を用いておられます。マタイ 20 章 25-28 節; マルコ 10 章 42-45 節; ヨハネ 12 章 26 節, 13 章 12-17 節参照)。イエスの模範は、牧師・教師による権威の行使が、すべての人に仕えるために、また自分自身を犠牲にして行われなければならないことを明確に示しています。言い換えれば、牧師としての権威は、特権というよりも、会衆の霊的成長と霊的な安全のために果たすべき牧師の責任の一つなのです。その権威は、会衆を悪い影響や、彼らを食い物にしようとする行為から守るためのものであり、牧師個人の利益のために与えられたものではありません。自分の権力を振りかざすことに喜びを見いだすような態度は、イエス・キリストの導きに真に従っている地域教会の指導者には、まったくふさわしく**ない**のです。

群れの真の模範となる(3 節):

……[あなたがたに]ゆだねられた人々に対して権威を振りかざすのではなく、群れの真の模範となりなさい。(第一ペテロ 5 章 3 節)

キリストが牧師・教師の従うべき模範であるように、牧師・教師もまた、自分の会衆に対して、見習うにふさわしい模範を示すべきです。神の御言葉を学び、教えるという責任を果たすことにおいても、また私生活においても、あらゆる面で真にキリストに忠実に従っているなら、そのような牧師は、自分の地位を誇るのではなく、確かに上記の聖句の命令を果たしていることになります。これが達成するには非常に高い基準であることは明らかです。牧師になるための準備は、決して容易なものでも、短期間で済むもの

でもありません。[4] また、牧師・教師の賜物、奉仕の準備として身につける必要のある技能、そして霊的成熟とその先へと個人的に前進する中で学んだ真理を効果的に活用するために必要な人格と自己鍛錬を養い、しかも私生活において人につまずきを与えることなく、それを一貫して実践することも、「難しいこと」を求めるものです（列王記下 2 章 9-10 節参照）。しかし、達成するのは困難であっても、以上のすべては、教える奉仕において成功するために絶対に必要なことです。したがって、自分の群れに対して見習うにふさわしい模範となるための基準は確かに非常に高いものですが、神の御言葉を教えるという務めをあえて引き受けようとする者は、誰であっても、その基準を満たすことが不可欠です。なぜなら、私たちが仕えているのは主イエス・キリストであり（コロサイ 3 章 24 節; エペソ 6 章 7 節; 第一テサロニケ 1 章 9 節参照）、私たちが申し開きをしなければならない相手も主だからです。

> 私の兄弟たちよ、あなたがたのうち、多くの者が教師になろうとしてはならない。私たち教師が、より厳しい裁きを
> 受けることを、あなたがたは知っているからである。（ヤコブ 3 章 1 節）

大牧者（4 節）：

> そして、大牧者が現れるとき、あなたがたは、決して色あせることのない栄光の冠を勝利の報いとして受けることになる。（第一ペテロ 5 章 4 節）

私たちの主が私たちを見守り、導いてくださることを、良い羊飼いが自分の羊を世話する姿になぞらえるたとえは、古代の信者たちの心に深く響いたものであり、今日でもなお私たちの心に深く響きます（創世記 48 章 15 節, 49 章 24 節; 詩篇 23 章 1-6 節, 28 章 9 節, 80 章 1 節; 伝道の書 12 章 11 節; イザヤ 40 章 10-11 節; エレミヤ 31 章 10 節, 49 章 19 節, 50 章 44 節; エゼキエル 34 章 23 節, 37 章 24 節; ミカ 5 章 2-5 節; ゼカリヤ 13 章 7 節; マタイ 2 章 6 節, 25 章 32 節, 26 章 31 節; マルコ 14 章 27 節; ヨハネ 10 章 2-16 節; ヘブル 13 章 20-21 節; 黙示録 7 章 17 節; 詩篇 119 章 176 節; 第一ペテロ 2 章 25 節参照）。羊の群れを世話した経験のない私たちでさえ、真に良い羊飼いが、自分の群れに必要なものをすべて与えて健やかに育て、さまざまな危険から守るために、どれほどの重労働、献身、勇気、忍耐を必要とするか、ある程度は理解できます。暑さや寒さ、危険、眠れない夜、その他多くの困難に耐えなければならないのです。私たちの必要を満たし、私たちを救い出すために主が払われた犠牲については、福音書を読む人なら誰でもよく知っています。そして、私たち

---

[4] 聖書の基礎第 6 部 B: 教会論、第 II.B.「牧師・教師」を参照してください。＜英文＞

の愛する救い主が、私たちのためにご自分の命を捨て、カルバリの十字架の暗闇の中で私たちのすべての罪のために死んでくださった、その犠牲ほど大きな犠牲は、誰にも想像することさえできません。

「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために自分の命を捨てる。」（ヨハネ 10 章 11 節）

(14)「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、わたしの羊もわたしを知っている。(15) それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために自分の命を捨てる。」（ヨハネ 10 章 14-15 節 /NIV 訳）

「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」（ヨハネ 15 章 13 節 /NIV 訳; 第一ヨハネ 3 章 16 節参照）

完全な羊飼いであられる私たちの主は、大牧者にふさわしい仕方で群れを世話する真に良い牧師となるために何が必要なのかを、全知の神として知っておられるだけでなく、ご自身の経験からも確かに知っておられます。そして、本来なら喜んで主に従うべきであった群れから、主ご自身が反対を受けられたことを見ると、御言葉を教える奉仕を忍耐強く続けることは、気の弱い人にできることではないと分かります。悪魔は常に良い羊飼いに敵対し、また、その群れの中には、羊飼いに対して本来あるべき応答をしようとしない者が、必ず大勢いるからです。それは、私たちの主の場合も同じでした。

するとイエスは答えて言われた。「ああ、不信仰で曲がった世代よ。いつまでわたしはあなたがたと共にいなければならないのか。いつまであなたがたに耐えなければならないのか。」（マタイ 17 章 17 節前半 /NKJV 訳; マルコ 9 章 19 節; ルカ 9 章 41 節参照）

モーセやエリヤでさえ、自分たちにゆだねられた人々にいら立ち、その結果、モーセは怒りを爆発させ、エリヤは逃げ出してしまいました。しかし、上に引用した主の言葉には、罪となるところは少しもありません（そのようなことは断じてありません！）。それは、主が地上におられた当時のイスラエルの実情をありのままに表したものです。そして、この言葉が私たちのために、特に牧師・教師たちのために記録されているのは、真理を伝え、神の群れを世話することが、愛による労苦であると同時に、忍耐を要する闘いでもあることを思い起こさせるためです。しかし、イエスが私たちに望んでおられる

とおりに、忍耐強く群れを牧し続ける者には、最後に大きな報いが待っているのです。

栄光の冠(4 節):

> そして、大牧者が現れるとき、あなたがたは、決して色あせることのない栄光の冠を勝利の報いとして受けることになる。(第一ペテロ 5 章 4 節)

キリストの裁きの座において信者に与えられる冠と報いについての教理は、別の箇所ですでに詳しく取り上げています。[5] 簡単に言えば、聖書にはさまざまな種類の報いが少なくとも暗示されており(例えば、第一コリント 3 章 12 節の「金、銀、宝石」)、また、この世における私たちの霊的な勝利に対して信者に与えられる報いも、疑いなく数多くありますが(例えば、黙示録 2 章 28 節の「明けの明星」)、聖書は、すべての信者の人生において達成し得る三つの主要な領域に対応する、三つの主要な栄誉の冠を示しています(これらは、種蒔きのたとえにおける「三十倍、六十倍、百倍」の実りの段階にも対応しています。マタイ 13 章 1-9 節; マルコ 4 章 1-9 節; ルカ 8 章 4-8 節)。すなわち、1)霊的成熟に達したことに対して与えられる義の冠(第二テモテ 4 章 8 節; 第一コリント 9 章 25 節; 黙示録 3 章 11 節参照)、2)霊的成熟の後に訪れる重大な試練を首尾よく乗り越えたことに対して与えられる命の冠(ヤコブ 1 章 12 節; 黙示録 2 章 10 節)、そして 3)ここで取り上げられている栄光の冠(ピリピ 4 章 1 節; 第一テサロニケ 2 章 19 節も参照)であり、これは、主イエス・キリストが私たち一人ひとりに割り当てられた生涯の奉仕を忠実に果たしたことに対して与えられるものです。

> 植える者と水を注ぐ者は一つであり、それぞれが自分の労苦に応じて、自分自身の報いを受けることになる。(第一コリント 3 章 8 節 /NKJV 訳)

ペテロはここで牧師・教師たちに向けて語っていますが、性別によっても、受けた特定の霊的賜物によっても、三つの冠のいずれか、あるいはそのすべてを獲得することが妨げられる信者は一人もいません。上に引用した聖句が宣言しているように、主からどのような務めを与えられていようとも、主は、私たちが実際に注いだ敬虔な努力に応じて、正しく報いてくださる方です。ですから、永遠の世界にはさまざまな違いが存在することになりますが(その詳細は、その日が来るまで私たちには分かりません)、キリストの御名によって差し出された一杯の冷たい水でさえ、必ずその行為にふさわしい報いを余すところなく受けると、私たちは絶対の確信を持つことができます(マタイ 10

---

[5] 「来たる艱難期　第 6 部:終末の事柄、第 I.7 節「教会の裁きと報い」を参照してください。また、Peter's Epistles #18、第 III.8 節「冠についての教理」も参照してください。

章 42 節)。そうであるなら、パウロやアポロのように、長年にわたってぶどう園で熱心に労苦してきた人々が、イエス・キリストのために行ったすべての働きに対して、豊かな報いを受けないことなど、どうしてあり得るでしょうか。

> (4) 賜物にはさまざまな種類があるが、御霊は同じである。(5) 奉仕の務めにはさまざまな種類があるが、主(すなわち、イエス・キリスト)は同じである。(6) また、結果にはさまざまな違いがあるが、あらゆる場合にすべての結果を生み出してくださる神は同じである。(7) そして、一人ひとりの[クリスチャン]には、益となるため(すなわち、教会を建て上げるため)に、御霊の現れが与えられている。(第一コリント 12 章 4-7 節)

聖霊は私たちの霊的賜物を割り当てられます。主イエス・キリストは、私たち一人ひとりに特定の奉仕の務めを割り当てられます。そして、父なる神がその結果をもたらしてくださいます。私たちの務めは、自分に与えられた賜物を見いだせるように霊的成熟へと成長し、主イエスから与えられる奉仕に備えるために、自分に降りかかる試練を乗り越え、そして、その奉仕に心を尽くして取り組むことです。その際、実際の結果を生み出してくださるのは父なる神であることを、常に心に留めておかなければなりません。そうすれば、私たちに耕すよう与えられた土地が非常に肥沃であろうと、めったにないほど実りの乏しい土地であろうと、私たちの報いは、人間の目に印象的に映る事柄ではなく、私たちの愛と献身と努力に基づいて決められることが分かります。

したがって、牧師・教師だけでなく、すべての信者が栄光の冠を獲得することができます。そして、すべての信者は、この祝福された目標を目指すべきです。なぜなら、それこそが、この世において私たちがイエス・キリストに栄光を帰する方法だからです。私たちが求めているのは主の栄光であり(ヨハネ 7 章 18 節参照)、主の体である教会を建て上げることに貢献することによって、主に栄光を帰することが実現するのです。女性には牧師・教師の賜物は与えられません。しかし、男性の信者の中でも、その賜物を受ける人は比較的少数です。もし栄光の冠が牧師・教師だけに限られているとすれば、それは実にごくまれにしか与えられない報いとなるでしょう。特に今日では、その賜物を与えられた男性のうち、イエス・キリストが彼らに望んでおられることを少しでも実行している人が、非常に少ないからです。そもそも奉仕のための準備をしておらず、また、たとえ奉仕に就いたとしても、神の御言葉を正しく教えることによって教会を建て上げていないのです。

これまでに見てきたように、教会は一つの体であり、人間の体と同じように、それぞれ異なる役割を持つ多くの部分から成り立っていて、そのすべてが体全体の正常な働き

に必要です。与えられた賜物に従って自分の役割を果たし、イエス・キリストに栄光を帰するような仕方で、それを一貫して行うことが、栄光の冠を受ける根拠となります。霊的賜物や性別にかかわらず、すべての信者が目指すべきなのは、このことです。パウロが自ら列挙した信仰の英雄たちについて語り終える際の言葉を借りて言い換えるなら(ヘブル 11 章 32 節)、聖書に登場する、疑いなく栄光の冠を獲得したすべての信者を挙げようとすれば、「時間が足りない」でしょう。しかし、この栄誉の冠がすべての人に与えられ得ることを示すために、その栄誉を間違いなく獲得した著名な女性信者たちを称賛する聖句の中から、よく知られたものをほんの少し、ここで改めて取り上げるのが適切でしょう。

「イスラエルの村々の人々は戦おうとせず、ためらっていた。私、デボラが立ち上がるまでは。私がイスラエルの母として立ち上がるまでは。」(士師記 5 章 7 節 /NIV 訳)

(14) すると、女たちはナオミに言った。「主はほむべきかな。主は今日、あなたに近親者がいなくなるようにはなさらなかった。その名がイスラエルで有名になりますように。(15) その人があなたの命を回復させ、老後のあなたを養う者となりますように。あなたを愛し、あなたにとって七人の息子にもまさる、あなたの嫁[ルツ]が、その子を産んだのですから。」(ルツ 4 章 14-15 節)

(32) そこでダビデはアビガイルに言った。「今日、あなたを私に会わせるために遣わしてくださったイスラエルの神、主はほむべきかな。(33) あなたの助言はほむべきかな。あなた自身もほむべきかな。あなたは今日、私が血を流し、自分の手で復讐することを思いとどまらせてくれたからだ。」(サムエル記上 25 章 32-33 節 /NKJV 訳)

御使いは彼女のところに来て言った。「喜びなさい。大いに恵まれた者よ。主があなたと共におられる。あなたは女たちの中で祝福された者である！」(ルカ 1 章 28 節 /NKJV 訳)

(1) 私たちの姉妹フェベを、あなたがたに推薦する。彼女はケンクレアにある教会に仕える者(文字どおりには「女性執事」)である。(2) どうか、聖徒にふさわしい仕方で、主にあって彼女を迎え入れ、彼女があなたがたの助けを必要とするどのような用事についても、援助してほしい。実際、彼女は多くの人々の助け手であり、私自身の助け手でもあったからである。(ローマ 16 章 1-2 節 /NKJV 訳)

⑶ キリスト・イエスにある私の同労者、プリスキラとアクラによろしく伝えてほしい。⑷ 彼らは私の命のために、自分たちの命を危険にさらしてくれた。彼らには私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝している。(ローマ 16 章 3-4 節 /NKJV 訳)

主にあって労苦しているトリファイナとトリフォサによろしく伝えてほしい。主にあって大いに労苦した、愛するペルシスによろしく伝えてほしい。(ローマ 16 章 12 節 /NKJV 訳)

信仰によって、サラ自身も子を宿す力を与えられ、年齢を過ぎていたにもかかわらず、子を産んだ。約束してくださった方を真実な方と信じたからである。(ヘブル 11 章 11 節 NKJV 訳)

信仰によって、遊女ラハブは、斥候たちを穏やかに迎え入れたので、信じなかった者たちと共に滅びることはなかった。(ヘブル 11 章 31 節 /NKJV 訳)

これほど多くのほかの人々について、「これ以上何を言いましょうか」。ヘブル人の助産婦たち(出エジプト 1 章 17-21 節)、リベカ(創世記 24 章 58 節, 27 章 13 節)、ハンナ(サムエル記上 1 章 1 節以下)、ホルダ(列王記下 22 章 14-20 節)、エステル(エステル 1 章 1 節以下)、アンナ(ルカ 2 章 36-38 節)、マリアとマルタ(マタイ 26 章 6-13 節; ヨハネ 11 章 17-44 節)、ルデヤ(使徒行伝 16 章 15 節)、ルポスの母(ローマ 16 章 13 節)、そして霊的成長、霊的前進、霊的な実りのために自分自身をささげた、ほかの数多くの女性たちについて、これ以上何を語ればよいでしょうか。彼女たちの名前は「天に書き記されている」(ルカ 10 章 20 節)だけでなく、聖書の中にも永遠に残されています。そして、彼女たちは、自分たちの人生に対するキリストの目的を果たしたことによって、私たちの主イエスに永遠に栄光を帰する三つの冠を獲得したのです。私たちも皆、「立ち上がって行動し」(歴代誌上 22 章 16 節)、「行って、同じように」(ルカ 10 章 37 節)しましょう。

第二段落(5-11 節)

⑸ 同じように、若い人たちよ、あなたがたも年長者たちに従いなさい。そして、あなたがたは皆、互いに対して謙遜な態度を身にまといなさい。なぜなら、

「神は高慢な者に敵対し、謙遜な者に恵みを与えられる」からである（箴言 3 章 34 節）。(6) それゆえ、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。そうすれば、神はふさわしい時にあなたがたを高く上げてくださる。(7) あなたがたの思い煩いをすべて神にゆだねなさい。神はあなたがたを心にかけてくださるからである。(8) 身を慎み、目を覚まして[警戒して]いなさい。あなたがたの敵である悪魔は、ほえたける獅子のように歩き回り、食い尽くすことのできる者を探している。(9) 信仰に堅く立って、悪魔に抵抗しなさい。この世にいるあなたがたの信仰の仲間たちも、[あなたがたと]まったく同じ種類の苦しみを経験していることを覚えていなさい。(10) そして、あらゆる恵みの神、すなわち、キリストにあってご自身の永遠の栄光へとあなたがたを召してくださった方は、あなたがたがしばらくの間苦しみを受けなければならなかったとしても、ご自身があなたがたを整え、堅固にし、強め、揺るぎない者としてくださる。(11) 栄光と力が、永遠から永遠まで神にあるように！ アーメン！（第一ペテロ 5 章 5-11 節）

従いなさい（5 節）：

同じように、若い人たちよ、あなたがたも年長者たちに従いなさい。（第一ペテロ 5 章 5 節前半）

ここでいう「若い人たち」には、男性だけでなく女性も含まれ、また、実際の年齢が若い人だけでなく、地域教会の交わりの中で権威ある立場にないすべての人、すなわち長老ではないすべての人が含まれます（長老は、すでに見たように、複数いる場合もあれば、一人だけの場合もあります）。これは年齢の問題ではなく、立場の上下関係と謙遜さの問題です。理想的には、年長者は長い人生の中で数々の苦難を経験することによって、正当な権威に従うことの大切さを学んでいるはずですが、会衆の中の若い人たちの中には、まだその重要な教訓を学んでいない人もいるかもしれません。

長老は、年齢にかかわらず、教会を治め、導く責任を負っています。そして、その務めの大部分は、神の御言葉を教えることによって果たされます。また、会衆も年齢にかかわらず、霊的な長老たちの権威に従い、敬意をもって接することが求められています。このような自発的な服従は、あらゆる軍事組織が適切に機能するために不可欠です。ですから、ペテロが hypotasso（ヒュポタッソー）という動詞を用いているのには、十分な理由があります。これは、軍隊の部隊を隊列に従って配置する際に用いられたギリシャ語です。

古代の世界では、戦いに勝利するために最も重要なことは、隊列の中で自分の持

ち場を守ることでした。秩序を保った軍隊は、通常、戦闘の混乱の中で隊列が乱れた、はるかに大きな敵軍を相手にしても、生き残り、打ち破ることができました。クリスチャンの人生も同様に戦いであり、銃弾や砲弾が絶え間なく飛び交っています。どのような困難、試練、苦難に遭遇しても、イエス・キリストの良い兵士であろうと決意し、重圧の中でも冷静さを失わないクリスチャンは、霊的に前進し、ほかの人々も同じように前進できるよう助けることができます。一方、悪魔の攻撃におびえて戦場を放棄してしまう人は、決して何かを成し遂げることもなく、仲間のクリスチャン兵士たちにとって特に役立つこともないでしょう。同じように、教会全体が牧師・教師の教えに従うなら、その教会は栄えるでしょう(もちろん、その牧師・教師自身も、神の御言葉を深く、正統な教理に従って教えるという自分の務めを果たしていることが前提です)。しかし、隊列の中に混乱が生じれば、少数の人々の不服従が、全体の崩壊を招くことにもなりかねません。

> しかし、イエスは彼らの考えを知って、こう言われた。「内部で分裂した王国はすべて荒れ果て、内部で分裂した町や家はどれも立ち行かない。」(マタイ 12 章 25 節 /NKJV 訳)

したがって、権威に従いなさいというこの命令は、牧師・教師やほかの長老たちの自尊心を満足させるために与えられたものではありません。むしろ、地域教会の中で秩序が正しく保たれることは、すべての人が共に霊的に成長するために不可欠な前提条件なのです。そして、そもそも教会の各成員がその教会に集っているのは、まさにその霊的成長を実現するためなのです。

> あなたがたを指導する人々に従い、服従しなさい。彼らは、やがて申し開きをしなければならない者として、あなたがたの魂を見守っているからである。彼らが嘆きながらではなく、喜びをもってその務めを果たせるようにしなさい。そうでなければ、あなたがたにとって益とならないからである。(ヘブル 13 章 17 節 /NKJV 訳)

謙遜な態度を身にまといなさい(5 節):

> そして、あなたがたは皆、互いに対して謙遜な態度を身にまといなさい……。(第一ペテロ 5 章 5 節後半)

「身にまとう」という動詞が、奴隷たちがよく用いていた帯や腰帯に由来していることは確かですが(enkomboomai<エンコンボオマイ>は kombos<コンボス>に由来します)、この名詞と動詞はどちらも十分に一般的な意味を持っているため、ペテロがここ

でも軍事的なたとえを続けていると理解することができます。いつの時代、どこの場所でも、兵士たちは戦いに赴く前に、自分たちが召された戦いを戦うために必要な装備、武器、防具を備えなければなりませんでした。これは、以前にも論じたように、クリスチャンにとってなじみ深いたとえです(エペソ 6 章 10-16 節; 第一テサロニケ 5 章 8 節)。[6] ペテロがここで、戦いに備えるために「身に着ける」よう命じている特別な装備は、謙遜です。ペテロがここで謙遜を特に取り上げているのは、謙遜が信者の霊的な武具の中でも、実際に最も重要なものの一つだからです。なぜなら、私たちが高慢になるなら(聖書において謙遜の反対とされるものです)、私たちは事実上、自分の人生に対する神の御心を拒み、神が私たちのために備えておられるものや、私たちに行うよう望んでおられることを謙虚に受け入れる代わりに、神に反抗していることになるからです。もし私たちが謙遜に主に従う代わりに、自分の自尊心を満足させることにふけるなら、自分を重要な存在だと感じる気持ちは高まるかもしれません。しかし実際には、自分を必要以上に高く評価し、それに応じた言動を取るという危険な道を進むことによって、私たちはあらゆる種類の誘惑に対して非常に無防備になってしまうのです。

「反逆は占いの罪に等しく、高慢は偶像礼拝の悪に等しい。」(サムエル記上 15 章 23 節前半 /NIV 訳)

「主を恐れることは悪を憎むことである。わたし[知恵]は、高ぶりと高慢、悪い行いと曲がった言葉を憎む。」(箴言 8 章 13 節 /NIV 訳)

高慢が来れば、恥辱も来る。しかし、謙遜な者には知恵が伴う。(箴言 11 章 2 節 /NIV 訳)

高慢は滅びに先立ち、おごり高ぶる心は倒れることに先立つ。(箴言 16 章 18 節 /NIV 訳)

「わたしは、世の悪のゆえに世界を罰し、罪のゆえに悪者たちを罰する。高ぶる者たちの傲慢を終わらせ、冷酷な者たちの高慢を低くする。」(イザヤ 13 章 11 節 /NIV 訳)

(21)「悪い思いは、人の内側、すなわちその心から出て来るからである。それは、不品行、盗み、殺人、(22) 姦淫、貪欲、悪意、欺き、好色、ねたみ、悪口、高慢、

---

[6] 特に、BB 6A:クリスチャンの歩みについての教理(Peripateology)、II.2.D.「軍事的なたとえ」を参照してください。

愚かさである。(23) これらの悪はすべて内側から出て来て、人を汚すのである。」(マルコ 7 章 21-23 節 /NIV 訳)

結局のところ、傲慢、高慢こそが悪魔の堕落の原因でした(イザヤ 14 章 13-15 節; エゼキエル 28 章 17 節)。そして、それは私たち自身の失敗のほとんど、あるいはすべての背後にある根本的な原因であり、動機でもあると考えることができます。神とその真理ではなく、自分自身に心を向けているとき、私たちは事実上、自分の武具を脱ぎ捨て、悪魔の策略や攻撃に対して無防備な状態になっているのです。すべてであられる方に栄光を帰する代わりに、「自分たち」が「何者か」であると思い始めるとき、私たちは神の守りを自ら失い、自分たちが実際にはいかに「無に等しい」存在であるかを、すぐに思い知らされることになります。私たちが、言葉や行いにおいてだけでなく(これが、この節の冒頭にある前の命令の主眼です)、心においても正しく自分を低くして従うことによってのみ、高慢や傲慢の目をくらませる力から、ある程度守られるのです。高慢や傲慢は、少しでも入り込む余地を与えられれば、霊的に最も成長したクリスチャンでさえ、いとも簡単につまずかせてしまうものなのです。

私に与えられた恵みによって、私はあなたがた一人ひとりに言う。自分を実際以上に高く評価してはならない。むしろ、神がそれぞれに分け与えてくださった信仰に応じて、慎み深く自分を評価しなさい。(ローマ 12 章 3 節 /NIV 訳)

神は高慢な者に敵対される(5 節):

「神は高慢な者に敵対し、謙遜な者に恵みを与えられる」(箴言 3 章 34 節)。(第一ペテロ 5 章 5 節後半)

この引用は(ヤコブも引用しています。ヤコブ 4 章 6 節)、箴言 3 章 34 節からのもので、ギリシヤ語の七十人訳聖書の訳文に従っています。ヘブル語原文では、「高慢な者」の代わりに letziym(レーツィーム)という語が使われており、通常は「嘲る者たち」と訳されます。「嘲り」が、心の内にある高慢さの外面的な現れとしてよく見られるものであることは明らかです。しかし、それが公然と表されるかどうかにかかわらず、高慢は神ご自身が敵対されるものです。そして、自ら進んで、何の理由もなく神の敵となることほど、悪く、愚かなことがあるでしょうか。しかし、謙遜な心のあり方から離れて「高慢の領域」に足を踏み入れるとき、私たちはまさにそのようなことをしているのです。モーセは「非常に謙遜な人であり、地上のだれよりも謙遜でした」(民数記 12 章 3 節)。しかし、私たちの主イエス・キリストを除けば、過去にもその後にも、だれよりも一貫して、また効果的に「謙遜を身にまとっていた」この人物でさえ、少なくとも一度は高慢の甘い誘惑

に屈してしまいました。それは、主の極めて具体的な指示よりも、自分自身の怒りやいら立ちのほうを重視してしまったときのことです。そして、彼はその過ちの代償として、四十年以上も待ち望んでいた約束の地に入ることを禁じられたのです（民数記 20 章 12 節）。

> (32) もしあなたが高慢になって愚かな振る舞いをしたり、悪事を企てたりしたのなら、恥じて口を覆いなさい。(33) 乳をかき回せばバターができ、鼻を打てば血が出るように、怒りをかき立てれば争いが生じる。（箴言 30 章 32-33 節 /NLT 訳）

しかし、神は謙遜な者に恵みを与えられる（5 節）：

> 「……しかし、謙遜な者に恵みを与えられる」（箴言 3 章 34 節）。（第一ペテロ 5 章 5 節後半）

「謙遜な者」とは、どのような人たちでしょうか。私たちの主について、またモーセ（聖書の中でキリストを象徴的に表す重要な「予型」の一人）について考えるとき、彼らの姿から、謙遜とは本質的に高慢さがないことであって、自信がないこと**ではない**という点にも注目することが重要です。私たちの主は、これまで生きた人の中で最も大胆な方であると同時に、最も謙遜な方でもありました。モーセは同時代の人々の中で最も謙遜な人でしたが、パロに立ち向かい、また、幾度となく自分を石で打ち殺そうとしたイスラエルの民全体に立ち向かう勇気を持っていました。私たちはダビデの偉大な勇気、大胆さ、自信を称賛しますが、彼もまた謙遜な人であり、ほとんどの場合、高慢を自分から遠ざけていた人でした。ダビデ、モーセ、そして聖書に登場するすべての偉大な信者たちや、その後の時代の偉大な信者たちに共通しているのは、神の偉大さと、自分たち、そして私たちが、主の恵みと憐れみに完全に依存していることを深く理解しているという点です。

> ダビデの賛歌。
> わが岩なる主はほむべきかな。
> 主は私の手に戦いを教え、
> 私の指に戦闘を教えてくださる。
> （詩篇 144 篇 1 節 /NKJV 訳）

ダビデは勇敢な戦士であり、史上最も勇敢な戦士の一人でした。しかし、彼が信頼していたのは主であり、主が自分に与えてくださったものでした。そして、彼はそれらを

与えてくださった主を尊び、主に栄光を帰しました。また、勇気と大胆さが求められるときには、自分自身ではなく主への信頼に基づいて、大胆かつ勇敢に行動しました。これこそが聖書の教える真の謙遜です。それは心の徳であり、霊的成熟に伴う徳です。そして、それは外面的に自分を卑下する態度の中に見いだされるものではなく、神の偉大さと憐れみを心の内で信頼し、深く認識することの中に見いだされるものなのです。

むしろ、律法主義的な人々の間で謙遜と見なされるような態度を偽って装う人々は、自分が謙遜な人間だと思われるはずだと考えてそのように振る舞い、その振る舞いによって自分はほかの人々よりも優れていると思い込んでいるのですから、極めて高慢であると言わざるを得ません。高慢は自分自身を信頼し、自分自身に栄光を帰します。真の謙遜は神を信頼し、神に栄光を帰します。前者も、特に臆病な相手に立ち向かう場合には、時として成功することがあるかもしれません。しかし、後者には常に主の助けがあります。ですから、真に敬虔な意味で謙遜な人々は、巨大なペリシテ人に立ち向かうときでさえ、心配や恐れを抱くことなく、「強く、雄々しくある」(申命記 32 章 6-7 節; ヨシュア 1 章 6-18 節)ことができるのです。なぜなら、戦いの勝敗は私たちにかかっているのではなく、むしろ、私たちは心の奥底で「戦いは主のものである」(サムエル記上 17 章 47 節)と理解しているからです。

では、その違いをどのように見分ければよいのでしょうか。信者が、自分自身や自分の名声を高めるためではなく、真理によって動機づけられ、主と主の民のために戦っているのであれば、それは高慢から来る無謀さではなく、謙遜から来る勇気であると確信することができます。

> (23) 主はこう言われる。「知恵ある者は自分の知恵を誇ってはならない。力ある者は自分の力を誇ってはならない。富む者は自分の富を誇ってはならない。(24) しかし、誇る者は、このことを誇りとしなさい。すなわち、わたしがどのような者であるかを悟り、知っていることを。わたしは主であり、地上で慈しみと公正と義を行う者である。わたしはこれらのことを喜ぶからである」と主は言われる。(エレミヤ 9 章 23-24 節 NIV 訳)

高慢な人々は自分自身に仕えます。真に謙遜な人々は神に仕えます。謙遜な人々は神の栄光を求めますが、高慢な人々は自分自身の栄光だけを求めます。高慢な人々は自分自身を誇りますが、聖書の教える真の謙遜を持つ人々は、神を知り、神と親しい関係にあることを誇ります。なぜなら、この世には神より偉大な方はおられず、したがって、神を知り、神と親しくあること以上に素晴らしいことは、この世に何もないから

です。

> ⑷ 姦淫を行う者たちよ（すなわち、男女を問わず不道徳な人々よ）！ 世との友情が神に敵対することであると知らないのか。それゆえ、世の友になろうとする者は、自らを神の敵としているのである。⑸ それとも、聖書（すなわち、ガラテヤ 5 章 17 節）が、「あなたがたの内に住んでいる御霊は、[そのような]ねたみ[罪の性質から生じるものであり、あなたがたの間に蔓延していることは、1-4 節に挙げられた例から明らかである]に『逆らって欲する』」と、意味もなく語っていると思うのか。⑹ しかし、[神は][これらすべての誘惑に]「まさる恵みを与えられる」（すなわち、肉に抵抗する御霊を備えてくださることによって）。それゆえ、聖書はこう言っている。「**神は高慢な者に敵対し、謙遜な者に恵みを与えられる。**」（ヤコブ 4 章 4-6 節）

上で述べられている「まさる恵み」とは、私たちがどのような困難、反対、誘惑に直面しても、それを乗り越えるのに十分な、主からの助けと好意のことです。もし私たちが主の望まれる道を歩み、主が私たちに望んでおられることを行っているなら、誰が、あるいは何が主に敵対できるでしょうか（ローマ 8 章 31-39 節）。私たちは、主が私たちを助け、支えるために、私たちに必要なことを何でもしてくださると確信しています。ですから、私たちは自信を持ち、「強く、雄々しくある」ことができるのです。それは、自分自身に対する高慢な信頼を少しでも持っているからではありません（断じてそのようなことがあってはなりません！）。そうではなく、私たちの主イエス・キリストにあって示された、私たちに対する神の愛と配慮を、絶対的な確信と信仰をもって信頼しているからなのです。

> 主は高く上げられているが、へりくだる者には恵みの目を向けられる。しかし、高慢な者については、遠くから見ておられるだけである。（詩篇 138 篇 6 節）

神があなたがたを高く上げてくださるように、へりくだりなさい（6 節）：

> だから、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。そうすれば、神は定められた時にあなたがたを高く上げてくださるであろう。（第一ペテロ 5 章 6 節）

この命令はすべての信者に当てはまりますが、何よりもまず、前の節に登場する「若い人たち」に向けられています。ペテロは彼らに、自分たちの教師である長老たちに従うように、また、ほかのすべての信者とともに「謙遜を身にまとう」ように勧めています。なぜなら、神は「謙遜な者に恵みを与えられる」一方で、「高慢な者に敵対される」からで

す。このことから、ペテロが使徒としての権威を持っていた幾つかの教会、すなわち「ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤの各地に散らされている」教会（第一ペテロ 1 章 1 節）では、一部の信者が教会の指導者たちに対して不満を募らせていたと推測できます。こうした不満の一部は、自分たちにも牧師・教師の賜物が与えられており、聖書や聖書の教理について自分たちが個人的に積んできた学びと備えは、現在それぞれの地域教会で指導的立場にある人々と同等か、あるいはそれ以上であると感じていた若い人たちから生じていたに違いありません。場合によっては、それが事実だったかもしれません。しかし、高慢な人々は「自分を実際以上に高く評価する」（ローマ 12 章 3 節）傾向があるものです。

しかし、ペテロは、資格、熱意、教える能力の相対的な優劣については、全く論じていません。ここでのペテロの目的にとって、こうした事実関係の問題は重要ではなかったのです。地域教会は、強いライオンがやがて弱いライオンに取って代わって群れの指導者になるような、ライオンの群れではありません。地域教会には、すべての事柄を「適切に、秩序正しく」（第一コリント 14 章 40 節）行う責任が主に対してあります。それには、そもそも長老や中心となる教師を選ぶために、それぞれの教会が採用する手続きだけでなく、その後、どのように、いつ、なぜ指導者を交代させたり、新たに加えたりするかということも含まれます。

さらに、ペテロは、これらの地域教会に対して、そのようなことをどのように、いつ、なぜ行うべきかを指示しようとはしていません。こうした問題を敬虔な仕方で解決できるのは、聖書と聖霊から与えられる知恵を用いる、直接関わっている人々だけだからです。しかし、いずれかの地域教会が若い人を指導的立場に迎え入れたり、現在の長老を新しい人と交代させたりすることを適切と判断しない限り、またその時が来るまでは、牧師や長老になることを望む人々は皆、主が自分たちのために役職や機会を開いてくださるのを忍耐強く待たなければならない、とペテロは極めて明確に述べています。それは、すべての信者が、主によって自分に与えられた霊的賜物が明らかにされ、主がご計画しておられる働きのために備えられ、そして、その賜物を用いる適切な機会が「定められた時に」（ペテロはここで意図的にそう明記しています）開かれるのを待たなければならないのと同じです。

若い人が決してしては**ならない**のは、主の御心に逆らい、教会内で政治的な働きかけを行うことによって、自分自身を高く上げ、ほかの人に取って代わろうとすることです。自分がどれほど優れていると思っていようとも、また、自分が取って代わろうとしている人が自分の目にはどれほど不十分に映っていようとも、そのような指導権の奪取を企てる行為はすべて、問題となっている地域教会を破壊するだけでなく、神の御心の

代わりに自分の意志を押し通そうとする高慢な若者自身の上に、神の敵意を招くことになるのです。

> (4)「わたしは高慢な者たちに言う。『もはや誇るな』と。悪しき者たちには、『角を高く上げるな。(5) 天に向かって角を高く上げるな。これほど傲慢な言葉を語るな』と。」(6) 東からも西からも、荒野からも、自分を高く上げることのできる者はいない。(7) 裁きを行われるのは神である。神はある者を低くし、別の者を高く上げられる。(詩篇 75 篇 4-7 節 /NIV 訳)

あなたがたの思い煩いを主に委ねなさい(7 節):

> ……あなたがたの思い煩いをすべて主に委ねなさい。主はあなたがたを心にかけてくださっているからである。(第一ペテロ 5 章 7 節)

これは実際には、詩篇 55 篇 22 節への言及です。

> あなたの思い煩いを主に委ねなさい。主はあなたを支えてくださる。主は正しい者が揺るがされることを決してお許しにならない。(詩篇 55 篇 22 節 /NIV 訳)

ペテロはこの詩篇を直接引用するのではなく、このよく知られた節を思い起こさせることによって、読者たちに一つの真理を思い出させています。それは、私たちがこの人生でどのような心配事や懸念を抱えていようとも、取るべき正しい方法は、人間的な努力だけでそれらを解決しようとすることではなく、主が私たちのために解決してくださると信頼することだという真理です。ダビデのこの励ましの言葉は、冷酷な敵たちから激しい攻撃を受け、そのただ中で主に助けを求めた彼自身の人生経験を背景としています。そのような状況にあっても、ダビデが御霊によって私たちに確信を与えているように、主は正しい者を支えてくださいます。私たちが主を信頼するなら、主は私たちを困難から救い出してくださるのです。主は、ご自分に属する者たちが、悪人たちの攻撃や策略によって滅ぼされることを「決してお許しになりません」。私たちがただ主を信頼するなら、たとえそのために主が海全体を二つに分けなければならないとしても、私たちは嵐の中を無事に通り抜けることができるのです。

ペテロは、私たちの主イエス・キリストが、ご自分に属する者たちを救い、危険から救い出してくださる動機を説明することによって、この祝福された確信をさらに個人的なものとしています。すなわち、主は私たちを「心にかけてくださっている」のです。宇宙の

主であり、すべてのものを創造された方（ヨハネ 1 章 3 節, 1 章 10 節; 第一コリント 8 章 6 節）、その力ある御言葉によって万物を保っておられる方（ヘブル 1 章 3 節; コロサイ 1 章 15-17 節参照）が、私たちと私たちの幸いを気にかけてくださっているということ以上に、素晴らしいことが考えられるでしょうか。これは、考えるだけでも本当に祝福されたことであり、また、決して忘れてはならない極めて重要なことです。困難に直面している信者は、絶望に陥り、主に見捨てられた、忘れられた、主は実際には自分のことなど気にかけておられない、と思い込んでしまいがちです。しかし、真実は全く違います。主は、ご自分がそのために死んでくださった人々を、決して忘れたことも、見捨てたこともありません。私たちはイエス・キリストに属しています。私たちは主のからだであり、主の花嫁であり、主の教会なのです。主はこれまでも常に私たちを「心にかけてくださって」おり、これからも永遠にそうしてくださるのです。

> 「女が自分の乳飲み子を忘れ、
> 自分の胎から生まれた子を憐れまないことがあろうか。
> たとえ彼女たちが忘れることがあっても、
> わたしはあなたを決して忘れない。」
> （イザヤ 49 章 15 節 /NKJV 訳）

ここでの文脈において、私たちの心配、懸念、不安をすべて手放し、それらをイエス・キリストに委ね、主がご自身の完全な方法で対処してくださると信頼しなさいという、この励ましに満ちた命令は、忍耐を失いかけている若い人たちに特に当てはまります。私たちの主は、ペテロを通して彼らに、忍耐強く待ち、主を信頼するようにと言っておられるのです。主のために働く機会を与えられたいと願うことは、この世で信者が抱く数多くの関心事や敬虔な願いの一つにすぎません。私たちは皆、ほとんどいつも何かしらのことで主を待ち望んでいるように思えます。それは確かに、クリスチャン生活の重要な部分です。また、それは私たちに与えられる試練の不可欠な部分でもあります。その試練は、私たちの信仰を築き上げ、主をより深く信頼することを学ばせ、信仰を強め、希望を一つに集中させ、そして、私たちが正しく応答するなら、主への愛をさらに深めるという、愛に満ちた目的をもって与えられているのです。これが、パウロがヘブル書で語っている「信仰による安息」です（ヘブル 4 章 1-10 節）。これは、教会時代における第四の戒めの成就であり、それによって私たちは、週に一日だけではなく、いつでも主にあって安息することを学びます。そして、私たちが御霊によって何を行うにしても、実際にそれを「行っておられる」のは私たちではなく主であると認識するのです。これが、困難の中で主を信頼することを学び、主が必ず救い出してくださるという全き確信をもって、自分の思い煩いや不安を本当に主に委ねるすべての信者に与えられる「完全な平安」、より正確には「二重の平安」なのです（イザヤ 26 章 3 節）。

主を信頼し、私たちの重荷を主に担っていただき(詩篇 68 篇 19 節)、すべての心配事や懸念を主に引き受けていただくということは、もちろん、待っている間、私たちは何もしなくてよいという意味ではありません。むしろ、それは、私たちが求めている救いが実現するように、合理的にできることはすべて行いながらも、その救いを実際にもたらしてくださるのは主であるという事実を、少しも見失わないということです。ここでの文脈に即して具体的に言えば、これらの若い人たちは、役職を得ようと画策するのではなく、主がまさにふさわしい時に、まさにふさわしい機会を開いてくださると信頼すべきなのです。そして、その間も、その機会に備えるために全力を尽くし続けるべきなのです。

> (3) それればかりではなく、私たちは苦難をも誇りとしよう。苦難が忍耐を生み出し、(4) 忍耐が試練に耐えた品性を生み出し、試練に耐えた品性が希望を生み出すことを知っているからである。(5) そして、この希望は私たちを失望させることがない。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからである。(ローマ 5 章 3-5 節)

> (7) それゆえ、神に従いなさい。悪魔に抵抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去るであろう。(8) 神に近づきなさい。そうすれば、神もあなたがたに近づいてくださる。罪人たちよ、手を清めなさい。二心の者たちよ、心を聖別しなさい。(9) 嘆き、悲しみ、泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを悲嘆に変えなさい。(10) 主の御前にへりくだりなさい。**そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださるであろう。**(ヤコブ 4 章 4-10 節)

目を覚まし、警戒していなさい(8 節):

> 身を慎み、目を覚まして[警戒して]いなさい。(第一ペテロ 5 章 8 節前半)

軍隊における歩哨の任務は、命に関わる極めて重大なものです。なぜなら、もし歩哨が眠り込んでしまい、そのとき敵が奇襲攻撃を仕掛けてきたなら、全員が滅ぼされてしまうからです。そのため、昔から、見張りの任務中に眠ることは、一般に死刑に相当する罪とされてきました。私たちの主は、艱難期の間、霊的に目を覚ましているよう注意を促しておられます。霊的な怠惰のために、泥棒が押し入って来たときに衣を失うことがないようにするためです(黙示録 16 章 15 節)。それと同じように、ペテロもここで私たちに呼びかけています。私たちは「身を慎んで」いなければなりません。それは、単に肉体的な意味で酔っていないということだけでなく、さらに重要なこととして、霊的な

力を弱めるあらゆるものから遠ざかるという意味でもあります。主が私たちをこの地上にとどめておかれる限り、私たちは自分の見張りの持ち場で警戒を怠らずにいなければなりません。十分に休息を取った状態であっても、昼間の見張りの任務は容易ではありません。まして、艱難期の暗闇が訪れたとき、この二つの命令を実行することは、どれほど難しくなることでしょう。しかし同時に、それだけいっそう必要にもなるのです！

> 「しかし、このことを知っておきなさい。家の主人が、泥棒の来る時刻を知っていたなら、目を覚ましていて、自分の家に押し入らせはしなかったであろう。」（マタイ 24 章 43 節 /NKJV 訳；参照：ルカ 12 章 39 節）

見張りに立つ兵士が、自分自身だけでなく仲間の兵士たちも守るのと同じように、私たち信者も、自分自身の霊的な健全さだけでなく、互いに対して責任を負っています。もし私たちが「眠り込んで」しまったなら、誰がキリストにある兄弟姉妹を励ますのでしょうか。誰が彼らに仕えるのでしょうか。そもそも、キリストのからだにはそのすべての部分が必要なのですから、私たち一人一人には果たすべき奉仕があるのです。一つの弱い部分が原因となって、次々と多くの人が倒れてしまうことがあります。しかし、一つの強い柱が、多くの弱い部分の崩壊を防ぐこともできるのです。ペテロの勧めに従い、私たちの主人が帰って来られるまで、それぞれの持ち場で目を覚まし、警戒し続けることを決意しようではありませんか。それは、自分自身の霊的な益と報いのためだけでなく、私たちがそうしてくれることを頼りにしている仲間の信者たちが救い出されるためでもあるのです。

> (34)「あなたがたは、自分自身に注意していなさい。放縦や泥酔、この世の思い煩いによって心が重くなり、その日が突然、[閉じる]罠のようにあなたがたに襲いかかることのないようにしなさい。(35) その日は、全地の表に住むすべての人々に臨むからである。(36) だから、これから起こるこれらすべてのことを耐え抜き、人の子の前に立つことができるように、祈りながら、いつも目を覚ましていなさい。」（ルカ 21 章 34-36 節）

あなたがたの敵である悪魔（8 節）：

> あなたがたの敵である悪魔は……（第一ペテロ 5 章 8 節後半）

サタンはすべての信者の敵です。ペテロにとってもそうでした。彼自身、苦い経験を通してそのことを痛いほどよく知っていました（ルカ 22 章 31-34 節）。しかし、ここでペテロは、御霊によって、牧者としての立場からサタンを「あなたがたの敵」と呼び、悪魔

が私たち一人一人にとって本当に敵であるという事実を、聞き手の心にいっそう強く刻み込もうとしています。悪魔とその配下の勢力は、私たちすべてに対して命に関わるほど激しく敵対しており、それに応じた行動を取っています。しかし、私たちの方はどうでしょうか。有名な言葉を言い換えるなら、私たちは霊的な戦いに関心がないかもしれませんが、霊的な戦いの方は私たちに関心を持っているのです。信者は、自分たちの周囲で激しく繰り広げられている目に見えない戦いに加わることを望まないかもしれません。しかし、望むと望まざるとにかかわらず、その戦いはやがて私たちにも及んできます。私たちの最高司令官が私たちを参加させておられるこの戦いに、私たち自身が関心を持っているかどうかにかかわらず、悪魔は私たちに「関心」を持っているのです。したがって、私たちが警戒しているべき理由は、単につまずいたり、道からそれたりしないよう注意するためだけではありません。私たちは、好むと好まざるとにかかわらず、命に関わる極めて重大な戦争のただ中にあり、最後まで戦い抜く戦いに参加しているのです。そして、霊的に生き残るためには、神の御言葉を通して御霊の力により、霊的成長、霊的前進、霊的な実りに励みながら、この戦いを積極的に戦う必要があります。

> (10) さらに前進していくにあたり、兄弟たちよ、主にあって、また主の大能の力によって、自分自身を強めなさい。(11) 悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、神の武具をすべて身に着けなさい。(12) 私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、[天使の]支配者たち、[天使の]権威者たち、この[現在の]暗闇を支配する宇宙的な勢力、天上の領域にいる悪の霊たちに対するものだからである。(13) それゆえ、困難の日に抵抗し、[霊的な備えにおいて必要な]すべてのことを完全に成し遂げた後も、自分の持ち場を守り抜くことができるように、神の武具をすべて取りなさい。(14) ですから、真理を腰に帯として締め、義の胸当てを着けて、しっかりと立ちなさい。(15) また、平和の福音を[伝える]備えの[履物]を足に履きなさい。(16) そして、どんなときにも信仰の盾を取りなさい。それによって、悪しき者の放つ火の矢をすべて消すことができるであろう。(17) また、[この霊的な戦いにおいて]救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち真理の御言葉を身に着けなさい。(エペソ 6 章 10-17 節)

悪魔は聖書の中で、ルシファー、サタン、誘惑する者、偽り者、悪しき者、蛇、竜、ベルゼブルなど、多くの名前で呼ばれています。これらの呼び名はそれぞれ、悪魔自身、その性格、そしてその策略について何らかのことを教えてくれます。[7] 「悪魔(devil)」は、ギリシヤ語の diabolos(ディアボロス)を英語で表す際の一般的な訳語

[7] 『サタンの反乱』第 4 部「サタンの世界体制」V.1.「悪魔の名前」<リンク先ファイルの 130 頁-/A4 版印刷本「サタンの反乱」の 321 頁- >を参照ください。

で、「中傷する者」を意味します。また、ここで「敵（adversary）」と訳されているのは、ギリシヤ語の antidikos（アンティディコス）で、「訴訟における相手方」を意味します。したがって、この文脈では、どちらの言葉も、サタンが天にある神の御座の前で絶えず信者たちを中傷し、私たちのあらゆる欠点、過ち、罪を主の御前に持ち出して、その過程で私たちと主の双方を非難しているという事実に注意を向けさせています。ですから、私たちが警戒を緩め、考えてはならないことを考えたり、言ってはならないことを言ったり、してはならないことをしたりするとき、また、これら三つの領域のいずれかにおいて果たすべき責任を怠るとき、私たちは悪魔に、天の法廷で私たちを中傷する機会を与えてしまうのです。言うまでもなく、これは主に喜ばれることではありません。そして、そのようなことが起こるのはごくまれであり、たとえ起こったとしても、その結果が比較的軽微なものである方が、すべての人にとって、特に私たち自身にとって、はるかに良いことです。主に知られていないことは何一つありません。しかし、私たちは敵対者とその手下たちからも、悪意をもって監視されているのです。これが、私たちが現在仕えている戦場の実情です。私たちの敵対者が天から投げ落とされ、もはや主の御前で私たちを中傷できなくなる日は、何と喜ばしい日でしょうか（もっとも、それは、その時なお地上で生きている人々にとって、さらに厳しい時代が訪れることを意味するのですが）！

> （10）そのとき、私は天で大きな声がこう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と御国、そして神のキリストの権威が現れた。私たちの兄弟たちを訴える者、昼も夜も私たちの神の御前で彼らを訴えていた者が、投げ落とされたからである。（11）しかし、彼ら［信者たち］は、小羊の血と自分たちの証しの言葉によって、［悪魔に］打ち勝った。彼らは死に至るまで［も］自分の命を惜しまなかったからである。（12）それゆえ、天とそこに住む者たちよ、喜べ！［しかし］地と海には災いがある。悪魔が［激しい］怒りを抱いて、あなたがたのところに下って来たからである。自分に残された時が［わずかしか］ないことを知っているからである。」（黙示録 12 章 10-12 節）

ほえたける獅子のように歩き回る（8 節）：

> ［サタンは］ほえたける獅子のように、食い尽くすことのできる者を探し求めて歩き回っている。（第一ペテロ 5 章 8 節後半）

戦略家としてのサタンの能力は、嘆かわしいほど欠けています。そもそも、自分の計画によって栄光の神を「出し抜き」、神を打ち負かすことができると考えたこと自体、まさに狂気の沙汰でした。しかし、戦術という点では、悪魔は実に狡猾な敵です。そして、彼の行動が戦略的というよりも状況に応じた反応的なものであるという事実が、その狡

猾さをいっそう際立たせているのかもしれません。簡単に言えば、サタンは機会を狙う者なのです。彼は、私たちが最も強いときや場所ではなく、最も弱いときや場所を狙って攻撃してきます。私たちが身を慎み、警戒しているなら、悪魔とその配下の者たちは、成功の見込みがより現実的にある別の標的を攻撃することに、その力を費やす可能性が高いでしょう。これは、私たちの敵が時折「探りを入れる攻撃」を仕掛けてこないという意味ではありません。実際、悪魔はしばしばそのようなことをします（成功する可能性が全くなかったにもかかわらず、私たちの主に対してさえ、悪魔がそうしたことはよく知られています。マタイ 4 章 1-11 節; マルコ 1 章 12-13 節; ルカ 4 章 1-13 節）。しかし、その試みが容易な成功につながらない場合、つまり、私たちが主にあって堅く立っているために、私たちを食い尽くすことができないと分かれば、悪魔は別の標的へと向かうのです。

> それゆえ、神に従いなさい。悪魔に抵抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去るであろう。（ヤコブ 4 章 7 節）

獅子は恐ろしい動物であり、そのほえ声は人を恐怖で身動きできなくさせることがあります。しかし、主はどんな獅子よりも強い方であり（士師記 14 章 5-6 節; サムエル記上 17 章 36 節; ダニエル 6 章 16-24 節）、常に私たちに必要な守りを与えてくださいます（列王記下 6 章 17 節参照）。また、私たちの内におられる御霊は神であられるので、悪魔とその全勢力を合わせたものを含め、この世のどんな脅威よりも強い方なのです（第一ヨハネ 4 章 4 節）。主に属する私たちが、恐ろしい攻撃を突然受けたときにはいつでも主を信頼することを習慣としているなら、そのような攻撃はすべて最終的には失敗に終わり、主が私たちを苦難の海の中を足を濡らすことなく安全に渡らせ、向こう岸へと導いてくださると確信することができます。

> (3) 私が恐れるとき、
> 私はあなたに信頼します。
> (4) 私は神を、その御言葉をほめたたえます。
> 私は神に信頼しています。
> 私は恐れません。
> ただの人間が私に何をなし得るでしょうか。
> （詩篇 56 篇 3-4 節 /NASB 訳 20）

> (31) それでは、これらのことについて、私たちは何と言おうか。神が私たちの味方であるなら、誰が私たちに敵対できようか。(32) ご自分の御子さえ惜しまず、私たちのために引き渡された方が、どうして御子とともに、私たちに[必要

な]すべてのものをも恵みとして与えてくださらないことがあろうか。(33) 誰が神に選ばれた者たちを[あえて]訴えることができようか。[私たちを]義と宣言してくださるのは神である。(34) 誰が[私たちを]罪に定めることができようか。キリスト・イエスこそ、[私たちの身代わりに罪に定められて]死なれた方であり、さらに、[私たちのために]死者の中からよみがえられ、神の右に[座して]おられ、私たちのために執り成してくださっている方である。(35) 何が私たちをキリストの愛から引き離すことができようか。苦難か、窮乏か、迫害か、飢えか、貧困か、危険か、暴力か。(36) 「あなたのために、私たちは一日中死に渡されている。私たちは、ほふられる羊と見なされた」と書かれているとおりである。(37) しかし、これらすべてのことにおいて、私たちは、[私たちのためにあれほどのことをしてくださるほどに]私たちを愛してくださった方によって、決定的な勝利を収めている。(38) 私は確信している。死も命も、天使の権威者たちも人間の権威者たちも、現在のものも将来のものも、天の諸勢力も、(39) それらが[選ばれた者たちの中で]最も高い地位にあるものであれ、[堕落した者たちの中で]最も低い地位にあるものであれ、また[この地上にある]ほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできないのである。(ローマ 8 章 31-39 節)

信仰に堅く立って、悪魔に抵抗しなさい(9 節):

信仰に堅く立って、悪魔に抵抗しなさい……(第一ペテロ 5 章 9 節前半)

ここで、後半の部分を前半から切り離して考えてはなりません。信仰こそが、私たちが悪魔に抵抗するための手段なのです。そして、悪しき者に効果的に抵抗するためには、信仰が不安定ではなく、「堅固」であることが不可欠です。ここで使われているギリシヤ語の動詞 anthistemi(アンティステーミ)は、文字どおりには、誰か、あるいは何かに対抗して立つことを意味し、パウロがエペソ 6 章 13 節で霊的な戦いを描写する際に用いているのと同じ言葉です。これは軍事的なたとえです。古代の戦闘では、仲間の兵士たちと並んで隊列を崩さずに踏みとどまることが、勝利への唯一の道であり、また、密集方陣や軍団の中で、自分自身と左右の仲間たちの安全を確保する唯一の確実な方法でもありました。激しい戦闘のただ中で持ち場を守り抜き、後退することによって自分自身や仲間の兵士たちの命を危険にさらさないためには、勇気が必要だったのです。

そのような肉体的な勇気は称賛に値する資質ですが、霊的な勇気には、はるかに高い価値があります。なぜなら、それを持つことによって得られる報いも、それを欠くこ

とによって生じる結果も、永遠に関わるものだからです。激しい戦闘の中で「堅く」立つために必要な肉体的な勇気は、戦うために必要な体力や健康と切り離せないことがほとんどです。しかし、人間はどれほど健康で強くても、目に見えない敵に対して、肉体的な方法で対抗したり抵抗したりすることは何一つできません。邪悪な敵を実際に阻止し、私たちを守ることができるのは、神と神の軍勢だけなのです。したがって、私たちの務めは、この霊的な戦いに直接加わろうとすることではありません（そのようなことは悪霊との関わりに手を出すことにすぎず、極めて危険で不敬虔な行為です）。私たちの務めは、主を信頼すること、すなわち、主ご自身が私たちに勝利を与えてくださると信じることです。私たちがただ信仰に堅く立ち、主は決して私たちを失望させることなく、どのような危険に直面しようとも、私たちに対するすべての約束を果たしてくださると確信しているなら、主は勝利を与えてくださいます。それは、肉体的には私たちよりはるかに強い敵と対峙しなければならない場合であっても同じです。

(9) パロが近づいて来たとき、イスラエル人が目を上げると、エジプト人が彼らの後を追って進軍して来ていた。彼らは非常に恐れ、主に向かって叫んだ。(11) 彼らはモーセに言った。「エジプトには墓がなかったので、あなたは私たちを荒野に連れ出して死なせようとしたのか。私たちをエジプトから連れ出して、何ということをしてくれたのか。(12) 私たちはエジプトで、『私たちに構わないでくれ。エジプト人に仕えさせてくれ』と言ったではないか。荒野で死ぬよりも、エジプト人に仕えていた方がよかったのだ！」(13) モーセは民に答えた。「恐れてはならない。堅く立ちなさい。そうすれば、主が今日あなたがたにもたらしてくださる救いを見るであろう。今日あなたがたが見ているエジプト人を、あなたがたは二度と見ることはない。(14) 主があなたがたのために戦ってくださる。あなたがたはただ静かにしていればよい。」（出エジプト 14 章 10-14 節 /NIV 訳）

(45) ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来る。しかし、私は、おまえが挑戦したイスラエルの軍勢の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かう。(46) 今日、主がおまえを私の手に渡してくださる。私はおまえを打ち倒し、その首を切り落とす。今日、私はペリシテ軍の死体を空の鳥や野の獣に与える。そうすれば、全世界はイスラエルに神がおられることを知るであろう。(47) ここに集まっているすべての者は、主が剣や槍によって救われるのではないことを知るであろう。なぜなら、この戦いは主のものだからである。主はおまえたち全員を私たちの手に渡してくださる。」（サムエル記上 17 章 45-47 節 /NIV 訳）

私たちが悪しき者とその悪霊の軍勢による攻撃に抵抗するための信仰とは、私たち

が信じ、信仰によって実生活に適用することを学んできた真理のすべてを含むものです。私たちが初めて福音の真理を受け入れたとき、その信仰はからし種ほどに小さなものでした。しかし、神の助けによって、時とともに木のように強く、高く成長してきたのです。私たちは日々、聖書の真理によってこの木に水を注いできました。そして、その木は植えられた良い土壌から成長してきました。神は試練によってその木を剪定し、御自分の光をその上に照らしてくださいました。その結果、木は豊かに成長し、その根を私たちの心の最も深いところにまで伸ばしてきたのです。これは一夜にして起こったことではありません。私たちが目にする巨大な樫の木が、たった一日であれほど大きくなったわけではないのと同じです。むしろ、私たちが熱心に真理を追い求め、それを聞き、信じ、生活に適用することを習慣としていく中で、信仰は日々成長し、私たち自身も気づかないうちに、少しずつ強められてきたのです。このように、均整が取れ、深く根を張り、強く高く育った木は、容易に倒されたり、根こそぎ引き抜かれたりすることはありません。どのような暴風にも、どのような洪水にも耐えるでしょう。私たちの信仰も、霊的な攻撃を受けるときにはいつでも、そのようであるべきなのです。

> (1) 幸いなことよ。悪しき者の助言に従って歩まず、罪人の道に立たず、あざける者たちの座に着かない人は。(2) その人は主の律法を喜びとし、昼も夜も主の教えを思い巡らす。(3) その人は、水のほとりに植えられた木のようであり、時が来れば実を結び、その葉は枯れることがない。その人は何をしても栄える。（詩篇 1 篇 1-3 節）

私たちは、クリスチャンとしての人生全体を通して、こうした試練に備えてきました。そして、試練が訪れたとき、私たちの務めは、主が私たちをその試練から無事に救い出してくださると信頼することです。主に知られていないことは何一つありません。私たちに対する神のご計画は完全であり、永遠の過去において、起こり得るあらゆる事態が十分に考慮されています。その中には、私たちが今直面しているどのような脅威からも、私たちを具体的に救い出すことが含まれています。私たちはイエス・キリストに属しています。主は私たちを愛し、心にかけてくださっています。主は、私たちの人生のあらゆる時点で、完全に真実であられました。からし種ほどの信仰をもって過去を振り返ってみるだけでも、そのことは明らかです。そして、私たちには、今ここで、成長し続ける信仰と信頼をもって、主のその真実さに応える権利があり、また義務もあるのです。特に、強い圧迫を受けているときにはそうです。私たちの信仰は私たちを守ってくれます。なぜなら、信仰によって私たちは、困難や苦難、サタンの攻撃に遭うとき、実際に私たちを守ることのできる唯一の方に頼るようになるからです。自分が何を感じ、何を聞き、何を見ようとも、主が私たちを救い出してくださると信頼し、信仰に「堅く」立ち続けるときにのみ、私たちは「悪しき日」に効果的に抵抗することができるのです（エペソ

6 章 13 節)。

悪しき日が訪れ、邪悪な欺く者たちが私を取り囲むとき、どうして私は恐れる必要があろうか。(詩篇 49 篇 5 節 /NIV 訳)

警戒していなさい。**信仰に堅く立ちなさい。**勇気を持ちなさい。強くありなさい。(第一コリント 16 章 13 節 /NIV 訳)

そして、どんなときにも**信仰の盾**を取りなさい。それによって、悪しき者の放つ火の矢をすべて消すことができるであろう。(エペソ 6 章 16 節)

あなたがたの仲間の信者たちも同じ苦しみを経験している(9 節):

……この世にいるあなたがたの仲間の信者たちも、[あなたがたと]全く同じような苦しみを経験していることを覚えていなさい。(第一ペテロ 5 章 9 節後半)

クリスチャン生活に伴う危険の一つは、困難なときに、時として自分のことばかり考えるようになり、悪魔が仕掛けてくる攻撃は自分個人を狙ったものであり、「こんなこと」が起こっているのは「自分だけだ」と思い込んでしまうことです。しかし、すべてのクリスチャンは、私たちが霊的な戦場で生きており、そこでは**すべての**信者が絶えず敵に監視され、攻撃の標的とされていることを、常に覚えていなければなりません。自分自身にばかり目を向けると、自己憐憫に陥ります。しかし、キリストに属する**すべての**人が、たとえその現れ方が異なり、ほかの人には見えないことがあるとしても、同じような重圧に耐えていると理解するなら、より謙遜で現実的な態度を持つようになります。**すべての**信者が、程度の差こそあれ、サタンからの敵対的な攻撃を受けており、私たち**すべて**が、何らかの苦しみに耐えているのです。

戦闘を経験した兵士たちは、最も困難な時期や戦闘の並外れた重圧を乗り越える助けとなったのは、仲間の兵士たちとの連帯感だったと、後になって語ることがよくあります。ペテロがここで私たちに訴えかけているのも、これと同じような仲間意識に基づいています。ペテロは、「こうしたすべてのこと」は私たち個人に関することではなく、イエス・キリストに関することであり、とりわけキリストのからだに関することなのだと思い起こさせているのです。私たちは苦しんでいるかもしれません。しかし、私たちが苦しんでいるときには、私たちが兄弟姉妹に対してそうすべきであるのと同じように、兄弟姉妹も私たちを助け、励ますためにそばにいてくれるべきです。そして、たとえ私たち自身が苦しんでいるとしても、兄弟姉妹もまた苦しんでいることを決して忘れてはなりません。

たとえ彼らが必ずしもそれを表に出していなくても、そうなのです。キリスト・イエスにあって敬虔な生活を送ろうと努める人は皆、悪しき者の攻撃に直面します（第二テモテ 3 章 12 節）。私たちが霊的に前進するにつれて、その重圧は増していきます。しかし、私たちは仲間であるクリスチャンたちに助けられています。彼らは私たちのために祈り、励まし、与えられた賜物と奉仕に応じて助けてくれます。そして、私たちも彼らを助けるべきなのです。私たちは**皆**、この戦いに共に参加しているのだということを、常に心に留めておかなければなりません。

> (25) ……からだの中に分裂がなく、各部分が互いに等しく配慮し合うためである。(26) 一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶ。(27) あなたがたはキリストのからだであり、一人一人がその部分なのである。（第一コリント 12 章 25 節後半-27 節 /NIV 訳）

あらゆる恵みの神（10 節）：

> そして、あらゆる恵みの神は……（第一ペテロ 5 章 10 節前半）

ここで使われている「恵み」という言葉は、ギリシヤ語の charis（カリス）で、「好意」や「善意」を意味する言葉です。英語のこの言葉は、一部の宗教的・神学的な分野では、ほとんど魔術的とも言える意味合いを帯びるようになっていますが、新約聖書の著者たちは、この言葉に神秘的な意味を与えたことはありません。むしろ、「恵み」とは、神がご自分の子供である私たちに向けておられる「善意」や慈しみ深い態度を表しています。イエス・キリストを信じる者として、私たちは御父の好意という傘の下に置かれています。さらに、私たちが「恵み」と呼ばれる神の好意的な態度（そして、それに伴うすべての祝福）を受けているのは、私たちが何かを行ったからではありません。そうではなく、私たちが信者であるために、御父が今、私たちをご自分の御子イエス・キリストと一つになっている者として見てくださっているからです。御子は、御父が常に「心から喜んでいる」と言われる方です（マタイ 3 章 17 節, 17 章 5 節）。「恵み」とは、御父がご自分の愛する者たちに向けておられる態度であり、祝福はその好意の結果です。そして、そのような恵みから生じる祝福はすべて、私たちがイエス・キリストに属していることによって、御父から私たちに与えられるのです。苦しみと忍耐という、この書簡全体を貫く主題の文脈において、使徒ペテロは御霊によって、私たちが御子と一つである以上、何ものも私たちを御父の好意と祝福、すなわち神の恵みから切り離すことはできないということを、思い起こさせることが重要だと考えたのです。

一人の人の違反によって、その一人を通して死が支配するようになったことは確かであるが（すなわち、アダムが自分の罪を子孫に受け継がせたことによって）、まして、あふれるほどの恵み、すなわち[義と認められることによる]この義の**賜物**を受ける者たちは、一人の方イエス・キリストの[犠牲]を通して、どれほど確実に[永遠の]命にあって支配することであろうか。（ローマ 5 章 17 節）

私は、キリスト・イエスにあってあなたがたに**与えられた**神の**恵み**のゆえに、いつもあなたがたのために私の神に感謝している。（第一コリント 1 章 4 節 /NET 訳）

あなたがたは、[キリストへの]信仰を通して、[神の]**恵み**によって救われたのである。そして、これはあなたがた自身から出たものではない。それ[救い]は、神からのあなたがたへの**賜物**なのである。（エペソ 2 章 8 節）

[神は]私たちの行いによってではなく、ご自身の[主権的な]選び[によって私たちを選ばれたこと]と、[私たちに対する]**恵み**によって、私たちを救い、聖なる召しをもって召してくださった。その恵みは、永遠の過去において、キリスト・イエスにあって私たちに与えられたものである。（第二テモテ 1 章 9 節）」

このように、イエス・キリストこそ、究極の**恵みの賜物**なのです。私たちを愛してくださる天の御父は、計り知れない代価を払って、この賜物を私たちに無償で与えてくださいました。それは、御子を受け入れようとするすべての人が永遠の命を得るためです。私たちが御父から受けるすべての好意、すべての祝福、すべての「恵み」は、イエス・キリストのゆえに与えられるものです。キリストは、ご自身の血によって、すなわち十字架上の暗闇の中で私たちの罪のために死なれることによって、私たちを罪から贖い、解放してくださったのです。

永遠の栄光へと召された（10 節）：

キリストにあって、あなたがたをご自身の永遠の栄光へと召してくださった方は……。（第一ペテロ 5 章 10 節後半）

すべての信者は、父なる神によって「召され」ています。すなわち、福音の真理に応答し、イエス・キリストへの信仰によって救われるようにと招かれたのです。この「召し」は、私たちがキリストの体の一員として選ばれたことの根拠となるものであり、神の聖なる定め、すなわち、創造が始まる前の過去の永遠において確立された神の完全なご

計画の一部です。[8] 神の完全なご計画には、この短い歴史の期間に起こるすべてのことが、例外なく含まれています。そして、この歴史が終わると、神と共に過ごす私たちの永遠の生活が始まるのです。これは、私たち皆が常に心に留めておくべき、大きな励ましとなる真理です。特に、この世で厳しい試練や苦しみを経験しているときには、なおさらです。なぜなら、この世の人生は永遠と比べれば非常に短いものだからです。そして、神は私たちを創造されることも、私たちが成長のため、また神の栄光のために苦しむことも、あらかじめ知っておられたのと同じように、私たちが召されたことによってもたらされる祝福された結末と結果をも、あらかじめ知り、定めておられたのです。すなわち、私たちの復活、イエス・キリストおよび教会全体との再会、そして神の完全で永遠の家族の一員として、新しいエルサレムで永遠に受ける報いです。これこそが、この文脈でペテロが述べている「永遠の栄光」です。それは、私たちに与えられる完全で永遠の栄光の体であり、父なる神が、ご自身の愛する御子に属するすべての者のために備えておられる、永遠の命の比類ない祝福と報いなのです。

> 今のこの時の苦難は、私たちのために現されることになっている栄光とは、到底比べものにならないと私は考える。(ローマ 8 章 18 節)

> しかし、書いてあるとおりである。「目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともないもの、[それこそが]神を愛する者たちのために神が備えてくださったものである。」(第一コリント 2 章 9 節)

> (17) なぜなら、今のこの一時的な軽い苦難は、計り知れないほど重みのある永遠の栄光を、私たちにもたらしているからである。(18) [それゆえ、私たちは]見えるものに[いっさい]心を向けず、[むしろ]見えないものに目を向けよう。見えるものは一時的なものである。しかし、見えないものは永遠に続くものである。(第二コリント 4 章 17-18 節)

しばらくの間、苦しみを受ける(10 節):

> ……あなたがたは、しばらくの間、苦しみを受けなければならなかったが。(第一ペテロ 5 章 10 節後半)

私たちが厳しい試練やつらい苦しみの中に置かれるとき、目を向けるべきものを見失ってしまうのは容易なことです。あまりにも容易なことです。本質的には、ヨブに起こ

---

[8] 特に、聖書の基礎第 4 部 B:救済論、第 I.2.b 節「予定、予知、召し」を参照してください。

ったのもこのことでした。もちろん、彼の苦しみは前例のないものであり、今なおそれに匹敵するものはありません。**しかも、**彼にはヨブ記を読むという恩恵もありませんでした。もしヨブ記があったなら、神がすべてを御手のうちに治めておられること、そして、どれほど絶望的に見え、どれほど困難な状況であっても、私たちが救い出されることは絶対に確かであると、自分自身に言い聞かせることができたでしょう。今日の私たちは、真理を信じる信仰によって、そのことを疑いなく知ることが**できます**。私たちに隠されているのは、いつ、どのような方法で救い出されるかということだけです。これは、私たちが直面している試練が、真の公正な試練となるために必要なことなのです。私たちが、どのような困難に遭遇していようとも、そこから救い出されるという真理を受け入れ、しっかりと心に抱くとき、神を信頼する私たちの姿勢によって、神に栄光が帰されます。それまでの間、私たちは、今経験している苦難がどのようなものであれ、永遠に続くことはないばかりか、実際には短いものであるという、確かで揺るぎない知識によって慰めを得ることができます。信仰の目でその期間を測るなら、そうなのです。

主よ、私の人生の終わりと、私に残された日数をお示しください。私の人生がどれほどはかないものであるかを、悟らせてください。(詩篇 39 篇 4 節 /NIV 訳)

私たちが知恵の心を得ることができるように、自分の日々を正しく数えることを教えてください。(詩篇 90 篇 12 節 /NIV 訳)

(32) あなたがたが初めて光を見たころ、激しい迫害の試練を耐え忍んだ、過ぎ去った日々を思い起こしなさい。(33) あなたがたは、公然と辱められ、迫害されることもあれば、同じような目に遭っている人々と苦しみを共にすることもあった。(34) あなたがたは、私が鎖につながれていることで共に苦しみ、自分の財産が没収されても、喜んでそれを受け入れた。なぜなら、自分たちには、それよりも価値があり、さらに永続する財産があることを知っていたからである。(35) だから、あなたがたのこの確信を捨ててはならない。それには大きな報いが伴うからである。(36) あなたがたには忍耐し続けることが必要である。それは、神の御心を行った後、約束されたものを勝利の報いとして受け取るためである。(37) なぜなら、あとほんのしばらく、何と短い、何と短い[待ち時間]であろうか。来たるべき方は来られ、遅れることはない。(38)「そのとき、わたしの義人は、その信仰によって生きる。しかし、もし後ずさりするなら、わたしの心はその者を喜ばない(ハバクク 2 章 3-4 節)。」(ヘブル 10 章 32-38 節)

永遠という尺度から見れば、まばたきするほどの短い時間のうちに、私たちはキリスト

の裁きの座の前に立ち、この世で行ったこと、あるいは行わなかったことのすべてについて評価を受けることになります（ローマ 14 章 10-12 節; 第二コリント 5 章 10 節）。その瞬間には、私たちが今耐えている苦しみは、どれ一つとして問題ではなくなります。重要になるのは、私たちがその苦しみにどのように対処したかということです。すなわち、主がその苦しみを乗り越えさせてくださると信頼したかどうか、また、ここでペテロを通して与えられた、私たちの苦しみは永遠には続かないという主の約束を信頼し、それに従って行動することで主に栄光を帰したかどうか、それともそうしなかったかということなのです。

> (26) たとえ人が全世界を手に入れても、自分の命を失ってしまうなら、何の益があるだろうか。また、人は自分の命を取り戻すために、何を代価として支払うことができるだろうか。(27) 人の子は、御父の栄光のうちに御使いたちと共に来る。そして、そのとき、それぞれの人に、その行いに応じて報いるのである。（マタイ 16 章 26-27 節）

このような見方、すなわち永遠の観点を保ち続けることは、それほど容易ではありません。まず霊的成熟に達しなければ、どの信者もこの観点を長く保つことはできません。そして、霊的成熟は、こうした「卒業試験」のような試練を経験することなしには、決して達成されません。その試練では、自分の力ではほとんどどうすることもできない状況の中で、神が救い出してくださるのを待ちながら、不当に受ける苦しみを忍耐強く耐え抜くことが求められます。ペテロはここで、救い出される時が**必ず**来ること、しかも間もなく来ることを思い起こさせてくれています……神の観点から見れば、ということですが。私たちの務めは、自分自身もその観点を持ち、今直面している「紅海」のような試練がどのようなものであれ、主が良しとされる時に、私たちを無事に向こう岸へ渡らせてくださるまで、主を待ち望むことです。私たちが主を待ち望むことをいとわないなら、主はそのために私たちを助け、救い出してくださいます。

> 主を待ち望め。
> 勇気を出せ。
> 主はあなたの心を強くしてくださる。
> 主を待ち望め。私はそう言う！
> （詩篇 27 篇 14 節 /NKJV 訳）

あなたがたを整え、堅固にし、強め、確立してくださる（10 節）：

……[神は]ご自身であなたがたを整え、堅固にし、強め、確立してくださる。（第一ペテロ 5 章 10 節後半）

私たちが苦しみに耐え抜くなら、その経験は私たちをさらに強くします。ここでペテロは、聖霊によって、神ご自身が間もなく私たちに必要なものを備え、私たちを安定させ、堅固にし、支えてくださると約束しています。それは、私たちが今直面しているこの試練を乗り越え、さらに将来の試練にも耐えられるようになるためです。

(2) 兄弟たちよ、さまざまな試練に襲われるときには、喜ぶように努めなさい。(3) なぜなら、あなたがたの信仰が試されることによって忍耐が生み出されることを、心に留めておくべきだからである。(4) だから、その忍耐が十分に育つようにしなさい。それは、あなたがたがあらゆる点で欠けるところのない者と認められ、十分に成熟し、完全な報いを受けるにふさわしい者となるためである。（ヤコブ 1 章 2-4 節）

(3) それればかりでなく、私たちは苦難をも誇りとしよう。苦難が忍耐を生み出し、(4) 忍耐が試練に耐えた品性を生み出し、試練に耐えた品性が希望を生み出すことを知っているからである。(5) そして、この希望は私たちを失望させることがない。なぜなら、私たちに与えられた聖霊を通して、神の愛が私たちの心に注がれているからである。（ローマ 5 章 3-5 節）

ここでペテロが述べている、整えられ、堅固にされ、強められ、確立されるということは、主として私たちの**信仰**に関わるものです。これまで何度も述べてきたように、信仰は筋肉のようなものです。成長するためには鍛えなければなりません。そして、その成長に最も役立つ鍛錬とは、信者が主を信頼することを固く決意して臨む試練の重圧です。私たちが困難の中で主に頼るなら、その度合いに応じて、主はその経験を用いて私たちを霊的に成長させてくださいます（これが「整える」と訳されている動詞 katartizo＜カタルティゾー＞の意味です）。[9] また、主はその試練を用いて私たちの信仰をさらに揺るぎない、堅固なものとし、その経験を通して私たちの信仰を強め、次に何が起ころうとも、よりよく対処できるようにしてくださいます。そして、その経験を用いて私たちの信仰の土台を築き上げ、ますます確かなものとしてくださるのです。ただし、それは、私たちが実際に、主が最後まで私たちを支え、乗り越えさせてくださると**信頼し**、また、試練が終わって救い出されるその時まで、勇気ある信仰の姿勢を実際に堅く

---

[9] 聖書の基礎第 6 部 A：霊的歩みの教理（Peripateology）、第 II.1 節「霊的成長に関する用語」を参照してください。

保ち**続ける**限りにおいてです。私たちが救い出されるその時は、今はまだ目に見えませんが、必ずあると確信しており、信仰の目によってはっきりと見ているのです。

> [それゆえ、私たちは]見えるものに[いっさい]心を向けず、[むしろ]見えないものに心を向けよう。見えるものは一時的なものである。しかし、見えないものは永遠に続くものである。(第二コリント 4 章 18 節)

> なぜなら、私たちは見えるものによってではなく、信仰によって歩んでいるからである。(第二コリント 5 章 7 節 NKJV 訳)

> (1) さらに、信仰[生ける御言葉と書き記された御言葉に対する信仰]こそが、私たちの望んでいる事柄に確かな実体を与えるものである。[信仰は]目に見えない事柄の証拠となる。(2) 昔の信者たちは、この[まさにその信仰]によって、神から認められたのである。(ヘブル 11 章 1-2 節)

> 信仰がなければ、[神に]喜ばれることは不可能である。なぜなら、神に近づこうとする者は、神が存在されること、また、熱心に神を求める者たちに報いてくださる方であることを信じなければならないからである。(ヘブル 11 章 6 節)

栄光と力がこの方にとこしえにあるように(11 節):

> 栄光と力が、この方にとこしえの世々にあるように!(第一ペテロ 5 章 11 節前半)

この節は、専門的にはしばしば「頌栄(しょうえい)」と呼ばれます。すなわち、主への賛美を表す言葉です。

> 主をほめたたえよ! 私たちの神に賛美を歌うことは、何とすばらしいことか。主をほめたたえることは、何と喜ばしく、ふさわしいことか!(詩篇 147 篇 1 節 NIV 訳)

確かに、主に属する私たちにとって、主が私たちのためにしてくださったすべてのことを思い、主を賛美するのは喜ばしいことです。私たちは喜んでそうしますが、それも不思議ではありません。なぜなら、私たちは主のために、まさにこの目的のために、すなわち主への賛美を歌い、主に栄光を帰するために創造されたからです。

わたしの名によって呼ばれるすべての者、**わたしの栄光のために、わたしが創造した者**、わたしが形造り、まことに、わたしが造った者を。（イザヤ 43 章 7 節）

(5) 神は、御心の喜びに従い、愛のうちに、イエス・キリストを通して私たちをご自身の子として迎えることをあらかじめ定められた。(6) それは、愛する御子にあって私たちに恵み深く与えてくださった、**その恵みの栄光がほめたたえられる**ためである。（エペソ 1 章 5-6 節）

(11) このキリストにあって、私たちもまた相続財産を受ける者とされた。私たちは、御心の望むところに従ってすべてのことを実現しておられる方のご計画に基づき、あらかじめ定められていたのである。(12) それは、以前からキリストに望みを置いていた私たちが、**神の栄光がほめたたえられる**という目的に仕えるためである。（エペソ 1 章 11-12 節）

神は光であり（第一ヨハネ 1 章 5 節）、栄光に満ちた、近づくことのできない光の中に住んでおられます（第一テモテ 6 章 16 節）。ここでペテロがしているように、**神を**栄光に満ちた方として認めることは、この世で私たちが収めたどのような成功についても、また受けたどのような祝福についても、すべての賛美を受けるにふさわしいのは神ご自身であると、私たちが理解していることを示す方法なのです。私たちは、どのような試練を経験したにせよ、そこから救い出されたことを喜び、感謝しています。ですから、ペテロと同じように、私たちも救い出してくださった方への深い感謝を表します。今、この地上においてそうするとともに、永遠の時を待ち望んでいるのです。その時には、主がどのような方であるか、また私たちのために何をしてくださったかを思い、「とこしえの世々に」主への賛美を歌うことになるからです。この表現は、文字どおりには「世々の世々に」という意味です。それは、もはや時間というものが存在せず、私たちが永遠に愛する方と共に、祝福に満ちた永遠だけが続く時を指しています。そして、これらすべては、私たちを救うためのイエス・キリストのご人格と御業によるものなのです。

[後の世代の人々は]やって来て、まだ生まれていない人々に[神の]義を告げ知らせるであろう。神がそれを成し遂げられたからである（すなわち、救いを）！（詩篇 22 篇 31 節; 参照:ヨハネ 19 章 30 節）

アーメン！(11 節)：

アーメン！（第一ペテロ 5 章 11 節後半）

ここでペテロが、聖霊によって与えられた熱意のうちに付け加えた、神の霊感によるこの句読点のような言葉を、私たちは当たり前のものとして受け止めてしまいがちです。この感嘆の言葉を見過ごし、その意味を忘れてしまうことも容易です。「アーメン」は「まことに」を意味するヘブル語の副詞で、同じ語根を持つ動詞から派生したものです。その動詞は、語幹の形によって「堅固である、確かである、確認される、忠実である」といった意味を持ちます。聖書を読む人なら誰でも知っているように、「アーメン」は新約聖書全体を通して、ある言葉が持つ深い真実性と、その言葉が私たちにも当てはまることを強調するために用いられています（私たちの主は、真理そのものが人となられた方なので、しばしばこの言葉を二度繰り返されました）。言い換えれば、試練や苦しみの時に神が私たちに必要なものを備えてくださるというペテロの確信に満ちた言葉に続いて、ここで用いられている「アーメン！」は、これが神の真理であり、信じ、心に留めておくに値するものであることを意味しています。すなわち、この世でどのような困難や苦難に直面しなければならないとしても、私たちが主が救い出してくださるのを待ち望みさえするなら、主は伸ばされた御腕と力強い御手をもって、何があろうとも私たちを最後まで支え、乗り越えさせてくださるのです。アーメン！

「見よ、私たちはこれを調べ、それが真実であることを確かめた。だから、これを聞き、自分自身に当てはめなさい。」（ヨブ 5 章 27 節 /NIV 訳）

第三段落（12-14 節）

（12）私が忠実な兄弟と考えているシルワノを通して、あなたがたに短く書き送り、励ましを与えるとともに、これが神の真の恵みであることを証ししました。この恵みに堅く立ちなさい。（13）あなたがたと共に選ばれたバビロンの教会が、あなたがたによろしくと言っています。私の息子マルコも同様です。（14）互いにアガペーの愛の口づけをもって［私に代わって］挨拶しなさい。キリスト・イエスにあるあなたがたすべてに、平安があるように。アーメン。（第一ペテロ 5 章 12-14 節）

シルワノ（12 節）：

私はシルワノを通して、あなたがたに短く書き送りました。（第一ペテロ 5 章 12 節前半）

この節が示しているように、シルワノはペテロの代筆者でした。つまり、ペテロが口述したこの書簡を、実際に書き記したのはシルワノだったのです。シルワノは、ラテン語の名前「シラス」のギリシヤ語形です（当時、その地域では、一人の人物がギリシヤ語やラテン語だけでなく、ヘブル語やアラム語など、複数の言語による名前の形を持つことはごく普通のことでした）。このシルワノは、まさしくパウロの長年の同労者であった「シラス」と同一人物です。シラスは、エルサレム教会の代表者の一人として、パウロやバルナバと共にアンテオケに遣わされました。それは、異邦人の信者には割礼を受ける必要がないことなどを確認した会議の書簡を届けるためでした（使徒行伝 15 章 22 節, 27 節）。シラスには預言の賜物があり、この滞在中、アンテオケの信者たちに御言葉を教える働きをしました。そして、その後もアンテオケにとどまったようです（使徒行伝 15 章 32-35 節）。その後、パウロとバルナバの間に意見の対立が生じると、シラスはパウロと組んで「第二次伝道旅行」に出発し（使徒行伝 15 章 40 節）、パウロたちと共にピリピ（使徒行伝 16 章 19 節, 25 節, 29 節）、テサロニケ（使徒行伝 17 章 4 節; 第一テサロニケ 1 章 1 節; 第二テサロニケ 1 章 1 節）、そしてベレヤへと同行しました（パウロがアテネに向かったとき、シラスはベレヤにとどまりました。使徒行伝 17 章 14-15 節）。その後、コリントでパウロと再会したシラスは、そこに新しく生まれた教会の働きにも貢献しました（使徒行伝 18 章 5 節; 第二コリント 1 章 19 節）。

聖書に記されているこれらの言及だけから、シラスがパウロの宣教活動の終わりまで同行し続けたと断定することはできません。しかし、この時点でシラスがローマにいるペテロと共に働いていることから、パウロが囚われの身となっていた間に、彼に同行してローマへ来た可能性があります。いずれにしても、ペテロがこの手紙をローマから書いたのは、パウロが殉教した後のある時期でしたから、シラスはその後、このもう一人の偉大な使徒の働きに加わったことになります。確かに言えるのは、シラスが、主の望まれるどのような形であれ、神の働きに自分自身を献げ続けたということです。これはまさに、私たちがこの世にいる限り、すべての信者が心がけるべきことなのです。

私たちのほとんどは、シラスについて深く考えたことがあまりないでしょう。しかし、聖書が伝えている彼の霊的な歩みの詳細を少し考えてみるだけでも、彼が神の御国のために非常に大きな働きを成し遂げたこと、そしてその結果、彼が永遠に受ける報いが驚くほど豊かなものとなることは、十分に明らかです。シラスは、いつの時代にも、ぶどう園で人知れず働き、イエス・キリストのために自分のすべてを献げてきた信者たちが大勢いることを示す、よい模範です。こうした信者たちは、この世の目には取るに足りない存在かもしれません。しかし、シラスと同じように、心の中で主とその真理、そして主の教会を第一としてきたのですから、やがて来るあの偉大な日に、イエス・キリストは、彼らが主を尊んできたように、彼らを尊んでくださるのです（サムエル記上 2 章 30

節)。

「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる者が先になる。」(マルコ 10 章 31 節 /NIV 訳)

「実に、後にいる者で先になる者がおり、先にいる者で後になる者がいる。」(ルカ 13 章 30 節 /NIV 訳)

私が忠実な兄弟と考えている(12 節):

……私が忠実な兄弟と考えている。(第一ペテロ 5 章 12 節後半)

忠実さは、クリスチャンとしての人生を成功させる鍵です。忠実であるとは、キリストが私たちに求めておられること、すなわち、自分を捨て、自分の十字架を負って主に従うことを、固い決意をもって実行することです。言い換えれば、キリストが優先されることを第一とし、その命令を果たすために必要なことは何でも行うと決意し、それを一貫して実行し続けることです。忠実さとは、イエスが私たちに求めておられるすべてのことを一貫して行い続けること**なのです**。もちろん、聖化もその一つですが、それに加えて非常に重要なのは、絶えず継続する霊的成長、霊的前進、そして霊的な実りです。私たちはイエス・キリストのために、一日一日、良い働きを続け、できる限り毎日を主のために有意義なものとし、一日うまくいかなかったからといって、それが悪い方向へ進むきっかけとならないようにします。むしろ、良い日を一日、また一日と積み重ねるよう努めるのです。すべてのクリスチャンが経験する間違いや過ち、つまずきに足を取られるのではなく、聖書を読み、聖書を学ぶことを忍耐強く続け、考えること、語ること、行うことのすべてにおいて真理を生活に適用し、祈りや励まし、また主から召された具体的な奉仕がどのようなものであれ、それを通して主に仕え続けるのです。私たちがこの良い歩みを一貫して忍耐強く続けるなら、それこそが忠実さであり、主が私たちに望んでおられることであり、主が報いてくださることなのです。

「主人は彼に言った。『よくやった。善良で**忠実な**しもべよ。あなたはわずかなものに**忠実**であったから、私はあなたに多くのものを任せよう。主人の喜びに入りなさい。』」(マタイ 25 章 23 節 /NKJV 訳; 参照:マタイ 25 章 21 節)

「主人は彼に言った。『よくやった。善良なしもべよ。あなたはごく小さなことに**忠実**であったから、十の町を治める権威を持ちなさい。』」(ルカ 19 章 17 節 /NKJV 訳)

キリストが私たちすべてを評価される際に、この特質が非常に重要であることを考えると、ペテロがここでシラスを「忠実」と呼ぶにあたり、「私の判断では」という小さな限定を付けていることには意味があります。これは、ペテロがシラスの忠実さについて少しでも疑いを抱いているという意味ではありません。むしろ、この言葉は、私たちが地上で忠実であったかどうかを最終的に裁かれるのは主イエス・キリストであると、ペテロが十分に認識していることを示しているにすぎません。なぜなら、信者の忠実さ（あるいは忠実さの欠如）は、究極的には、私たちが**主に対して**どれほど変わらず忠実であり、献身しているかということにかかっているからです。

> (42) そこで主は言われた。「それでは、主人がその家の者たちの上に立て、時に応じて食物を分配させる、あの**忠実で**賢い管理人とは、いったい誰であろうか。(43) 主人が帰って来たとき、そのようにしているところを見られるしもべは幸いである。(44) まことに、あなたがたに言う。主人はそのしもべに、自分のすべての財産を管理させるであろう。」（ルカ 12 章 42-44 節 /NKJV 訳）

> (1) 人は[誰でも]私たちを、キリストのしもべであり、神の奥義を委ねられた管理人であると見なすべきである。(2) さて、管理人に求められるのは、[主に対して]**忠実**である（すなわち、それゆえに信頼に値する）と認められる者であることである。(3) 私にとって、あなたがたに裁かれることも、人間の裁判によって裁かれることも、まったく取るに足りないことである。(4) 私は自分自身を裁くことさえしない。しかし、だからといって、それによって私が義と認められるわけでもない。私を裁かれるのは**主**である。(5) だから、主が来られる時までは、時に先立って裁いてはならない。主は暗闇に隠された事柄を照らし出し、すべての人の心の思いを明らかにされる。そのとき、それぞれの人は神から称賛を受けるのである。（第一コリント 4 章 1-5 節）

神の真の恵み（12 節）：

> 私はあなたがたに短く書き送り……あなたがたを励ますとともに、これが神の真の恵みであることを証ししました。（第一ペテロ 5 章 12 節後半）

ここで言う「これ」とは、この手紙で述べられている神の恵みのことです。すなわち、ペテロがこの書簡全体を通して私たちを励まし、証ししてきた、神が私たちに示してくださるご好意のことです。イエス・キリストを信じる者として、私たちは父なる神の善意、好意、祝福、恵みを受けているのです。この祝福された真理について、キリストの使徒

が聖霊によって証しし、それによって私たちを励ましてくれているのですから、私たちには確かな権威に基づく保証があります。私たちは試練に直面するかもしれません。いや、実際に直面するでしょう。苦しみに耐えなければならないこともあるかもしれません。いや、実際にそうなるでしょう。しかし、どれほど大きく、どれほど厳しい試練や苦難**であっても**、神の恵み深い助けを受ける**ことなく**、それらに直面しなければならないことは決してありません。「恵みにより、信仰を通して」イエス・キリストに属する者となった私たちにとって（エペソ 2 章 8-9 節）、これは祝福された受け継ぐべき財産であり、天の故郷に帰るまで、決して見失ってはならないものなのです。

> (1) こうして、私たちは信仰によって義と認められたのだから、私たちの主イエス・キリストを通して、[父なる]神との間に[すでに持っている]平和をしっかりと自分のものにしよう。(2) また、この方を通して、私たちは**今立っているこの恵みの中へ**と入る道をも得たのであり、神の栄光にあずかる希望（すなわち、私たちの復活を待ち望むこと）**を誇りとしよう。**（ローマ 5 章 1-2 節）

ペテロがこの書簡で私たちに教えてきたことは、すべて直接的または間接的に、人生の重圧や、すべての信者が経験する不当な苦しみ、困難、試練に、私たちがどのように対処すべきかということに焦点を当てています。ペテロ自身にとっては短い書簡でしたが（彼には間違いなく、もっと多くの語るべきことがあったでしょう。しかし、聖霊はこれで十分であると定められたのです）、そのすべてがこのことに関わっているのです。私たちには聖霊がおられます。聖書による励まし、神の御言葉の真理があります。私たちに仕え、私たちのために祈ってくれる他の信者たちの支えがあります。復活と報いを伴う永遠の命という、今の私たちの想像をはるかに超える、確かで揺るぎない希望があります。そして、これらすべては、私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストの、言葉では言い表せない犠牲によって与えられたものです。主は、私たちが主と、またすべての兄弟姉妹たちと共に永遠の命を持つことができるように、私たちのために死んでくださったのです。**これこそ**が神の真の恵みであり、それを持っている私たちは、人間の理解をはるかに超えるほど豊かに祝福されているのです。

恵みに応えて堅く立つ（12 節）：

> この[「真の恵み」]に応えて、堅く立ちなさい。（第一ペテロ 5 章 12 節後半）

ほとんどの聖書翻訳では、この短い命令を「その恵みの中に堅く立ちなさい」（あるいはそれに類する表現）と訳しています。しかし、そのような訳では、ここで使われてい

るのが対格を伴う前置詞 〈「～へ」「～に向かって」という方向や対象を表す〉eis（エイス）であって、与格を伴う前置詞 〈「～の中に」「～において」という位置や状態を表す〉en（エン）ではないという事実が見落とされています（『その恵みの中に』という訳になるためには、前置詞 en が与格とともに使われていなければなりません）。伝統的な神学では、「恵み」はしばしば誤解され、理解することのできない神秘的な概念に変えられてしまっています。実際には、今回の学びですでに何度か説明してきたように、「恵み」とは、神がご自身の子供たちに向けてくださるご好意のことであり、イエス・キリストを信じる私たちが、神の家族の一員であるという栄光に満ちた立場と、それに伴うすべての祝福を意味します。キリストにあって、私たちは皆、天の父から次々と祝福を受け、それを享受しているのです。

> なぜなら、私たちは皆、[キリストの]満ち満ちた豊かさから、恵みの賜物を次から次へと受けているからである。（ヨハネ 1 章 16 節 /NET 訳）

神は私たちを祝福し、私たちに好意を向けてくださいます。それは、私たちが自分の子供たちに好意を向け、祝福を与えるのと同じですが、天の父はそれを完全に、しかも無限の豊かさをもって行ってくださるのです。私たちは神の恵みを受ける者として、聖霊を与えられ、聖書を与えられ、霊的に成長するための手段（その不可欠な取り組みを支えてくれる働きや奉仕者、そして仲間のクリスチャンたち）を与えられ、それによって永遠の大きな報いを得るための手段も与えられています。しかし、ペテロはここで、クリスチャンとしての人生における成功が、自動的に保証されているわけではないことを思い起こさせています。**私たち自身が**「堅く立たなければならない」のです。父なる神がイエス・キリストにあって私たちに与えてくださった、恵みによるすばらしい機会を活用し、この地上で命じられているすべてのことを行わなければなりません。すなわち、霊的に成長し、キリストと共に歩む中で霊的に前進し、次々と訪れる試練を乗り越え、また、与えられた奉仕の働きや奉仕の機会を通して、他の人々も同じように歩めるよう助けることです。これこそが、父なる神がイエス・キリストにあって私たちに与えてくださったすばらしい恵みに対して、またその恵みに応えて、私たちが「堅く立つ」ということなのです。

> さて、兄弟姉妹たちよ。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、もう一度思い起こさせたい。あなたがたはその福音を受け入れ、その上に**堅く立っている。**（第一コリント 15 章 1 節 /NIV 訳）

> 目を覚ましていなさい。**信仰に堅く立ちなさい。**勇気を持ちなさい。強くありなさい。（第一コリント 16 章 13 節 /CSB 訳）

(10) だから、何が起ころうとも、主から力を得て、その力強い御力によって強められなさい。(11) 悪魔の策略に対して**堅く立つことができるように**、神の武具をすべて身に着けなさい。(エペソ 6 章 10-11 節)

それゆえ、私が深く慕っている愛する兄弟たち、私の喜びであり、私の[勝利の]冠である人たちよ。愛する者たちよ、この[私があなたがたに書き送った]ようにして、**主にあって堅く立ちなさい**！(ピリピ 4 章 1 節)

あなたがたの仲間であり、キリストのしもべであるエパフラスが、あなたがたによろしくと言っている。彼は、あなたがたが神のすべての御心において完全で、**欠けるところなく堅く立つことができるように**、いつも熱心に祈りのうちに奮闘している。(コロサイ 4 章 12 節 /NKJV 訳)

あなたがたが主にあって堅く立っているなら、私たちは今、本当に生きていると言えるからである。(第一テサロニケ 3 章 8 節 /NASB 訳)

あなたがたをつまずかないように守り、また、ご自身の栄光の御前に、傷のない者として、大きな喜びをもって**立たせる**ことのできる方に。(ユダ 1 章 24 節 /NASB 訳)

バビロンの教会(13 節):

あなたがたと共に選ばれたバビロンの教会が、あなたがたによろしくと言っています。(第一ペテロ 5 章 13 節前半)

歴史上のこの時点では、かつて名高かったバビロンの都は、特に重要性のない小さな町になっていました。ペテロがそこにいたはずだと考える理由はなく、実際にそこにいたことを示す説得力のある証拠もありません(また、使徒が訪問するほどの規模や重要性を持つ教会が、かつてそこに存在したという証拠もありません)。しかし、ペテロとローマとの関係は、さまざまな伝承資料によって十分に裏付けられており、彼がこの言葉で指しているのは、間違いなくその大都市です。帝国の首都に言及することを慎重に避けようとしたためなのか、それとも二つの帝国の中心地の間にある明らかな類似性を思い起こさせるためなのか、聖霊はこの謎めいた表現が用いられることを許し、それを正しく解釈することを私たちに委ねられました。しかし、ここで理解しておくべき重要なことが一つあります。それは、ペテロの言葉が、バビロンとローマの権力、残虐さ、迫

害を同一視しているとしても、だからといってローマの都を黙示録の奥義であるバビロンと同一視する解釈には、何の正当な根拠もないということです（ましてや、それから何世紀も後にならなければ存在しなかったローマ・カトリック教会という「普遍的」教会と同一視することには、さらに根拠がありません。その教会自身が唱える伝説的な主張とは異なります）。

ペテロの手紙の読者の多くはローマ市民であり、迫害が始まりつつあったにもかかわらず、少なくとも名目上は祖国に対する愛国心を持っていたことは間違いないでしょう。ローマを活動の拠点として以来、ペテロはこの表現を用いることによって、私たちの信仰と、現世において忠誠を負う国家とが一体であるかのような考えを、読者たちから取り除く必要を感じていたようです。確かにクリスチャンには、神の御心によって置かれた国がどこであれ、その国の良き市民となる責任があります。しかし同時に、あらゆることにおいて神の御国を第一とすることを、決して怠ってはなりません。この手紙の執筆地としてローマの名を挙げていたなら、この重要な点をしっかり理解していない人々には、相反する印象を与えてしまった可能性が十分にあります。一方、ローマを「バビロン」と呼ぶことによって、現世における私たちの責任と霊的な責任との違いが、極めて明確になるのです。

実際には、ここに「教会」という言葉（ギリシヤ語 ekklesia＜エクレシア＞）は出てきません。しかし、ギリシヤ語では、何が省略されているかが（ギリシヤ語を読む人にとって）十分に明らかな場合、特定の名詞が省略されることがよくあります。「選ばれた」という形容詞は女性単数形ですが、それが修飾する名詞が近くにないため、私たちはその名詞を補わなければなりません。この手紙を受け取るクリスチャンたちに挨拶を送ることのできる「選ばれた」ものとは、もちろんローマの教会以外には考えられません。「選ばれた」という形容詞と「教会」という名詞（語源的には「呼び出された者たちの集まり」）を合わせると、「選ばれるために呼び出された」という意味になります。個々の教会が召し出され、選ばれた者たちの集まりであると言えるのは、私たち全員が真の普遍的な教会の一員だからにほかなりません。イエス・キリストの教会、すなわち、特別な者として他から分けられるために召し出された、選ばれた者たちからなる、選りすぐりの集まりに属していることは、名誉であり、特権でもあります。それは、これまで存在した中で最も限られた者だけが属することのできる集まりです。これほど限られた集まりであるのは、キリストが全人類のために死なれなかったからではありません（主は確かに全人類のために死なれました）。そうではなく、へりくだって信仰によって命の賜物を受け入れ、主の教会の一員となることで、自分自身を永遠の命にふさわしい者とする人が、ごくわずかしかいないからなのです。

「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない。」(マタイ 22 章 14 節 /NKJV 訳)

選ばれてキリストの体に加えられたということは、教会全体に共通する事実です。ですから、ある地域に住み、教会の一つの「地域的な集まり」に属する信者たちが、他のすべての信者たちとの一体感を抱き、それを表すことは、正しく良いことなのです。住んでいる場所や生い立ち、話す言語、その他どのような違いがあろうとも、それらは問題ではありません。ただし、神の御言葉の真理に対する共通の愛と忠誠だけは別です。なぜなら、私たちが信じたときに、私たちを主にあって一つに結び合わせ、また今も、私たち全員が日々その同じ真理を通して主に近づこうと努める中で、私たちを結び合わせているのは、生ける神の御言葉であられる方から与えられた、書き記された神の御言葉の真理だからです(そして、この真理は、同じように真理を愛する心を持たない人々から私たちを分けるものでもあります。マタイ 10 章 34-39 節と、ヘブル 4 章 12-13 節およびエペソ 6 章 17 節を比較)。この神聖な献身を共にする者は皆、交わりを持つにふさわしい兄弟姉妹です。実際、信者同士の間にも、信者のどの二つの集まりの間にも、神の御前における違いはありません。ただし、真理に対する姿勢の違いだけは別です。

あなたの子供たち(すなわち、あなたの会衆の成員)の中に、父が私たちに命じられたとおり、**真理のうち**を歩んでいる人々がいることを知り、私は大いに喜んでいる。(第二ヨハネ 1 章 4 節 /NIV 訳)

私の子供たち(すなわち、どの教会であれ、私の教えの権威の下にあるすべての人々)が**真理のうち**を歩んでいると聞くことほど、私にとって大きな喜びはない。(第三ヨハネ 1 章 4 節 /NIV 訳)

私の息子マルコ(13 節):

……私の息子マルコも同様です。(第一ペテロ 5 章 13 節後半)

ペテロが愛情を込めて霊的な「息子」と呼んでいるマルコは、間違いなく使徒行伝に登場するヨハネ・マルコのことです(使徒行伝 12 章 2 節, 25 節, 13 章 5 節, 13 節, 15 章 37-39 節)。彼は、主が十字架につけられる前夜、裏切られた夜に、ゲツセマネの園でペテロや他の弟子たち、そして主と共にいた、あの若者です。マルコは捕らえられそうになりましたが、身を振りほどき、身にまとっていた唯一の衣服である亜麻布の衣を、捕らえようとした者の手に残して、裸のまま夜の闇へと逃げ去った人物です(マルコ 14 章 52 節)。

マルコの歩みは、特に、何度もつまずきながらも、最終的には神の御心を行うようになった信者にとって、大きな励ましとなるものです。イエスが裏切られた夜の彼の行動は、他の弟子たちと比べて良くも悪くもありませんでした。結局、全員が逃げ去ったからです（マタイ 26 章 56 節; マルコ 14 章 50 節）。その後、ペテロが奇跡的に牢獄から解放された夜には、マルコが母親の家で他の信者たちと共に、ペテロのために祈りながら待っていたことが記されています（使徒行伝 12 章 12 節）。さらに後には、パウロとバルナバがエルサレムの長老たちの会議に関わる任務を終えてアンテオケに戻る際、マルコも彼らに同行しました（使徒行伝 12 章 25 節）。

なぜマルコがペテロと共にエルサレムにとどまらなかったのかは分かりません（新しい経験をしたいという思いが強かったのかもしれません）。しかし、この新たな交わりによって、彼がいわゆる第一次伝道旅行で、パウロとバルナバの助手として同行することになったのは確かです（使徒行伝 13 章 5 節）。ところが、彼は最後まで同行しませんでした。一行がキプロス島を離れて船で本土に向かったとき、彼らと別れて故郷のエルサレムへ帰ってしまったのです（使徒行伝 13 章 13 節）。このような旅の困難が若いマルコにはあまりにも厳しく、ホームシックと霊的な疲れに負けてしまったのではないかと推測できます。その結果、彼は、教会時代の初期に聖書が記録している、最もすばらしく奇跡的な出来事のいくつかを経験する機会を逃してしまいました。パウロたちが初めて小アジアで福音を宣べ伝え、聖霊によって「しるしと不思議と力あるわざ」が行われた、その働きに加わる機会を失ったのです（第二コリント 12 章 2 節参照）。

その後、パウロが、最近信仰に導かれた新しい信者たちを訪ねて励まし、強めるために、二度目の伝道旅行に出ようとしたとき、バルナバはマルコにもう一度機会を与えることを提案しました。マルコは、実はバルナバのいとこでした。しかし、パウロはこの提案に反対しました。非常に意志の強いこの二人の間に生じた意見の対立は、一時的な決裂を招きました。パウロはシラスを連れて小アジアの諸都市を再訪するために出発し（その後、最終的にはギリシヤへと旅を進めました）、一方、バルナバはマルコを連れてキプロス島へ戻りました（使徒行伝 15 章 37-39 節）。

イエス・キリストを真に信じる者は、何よりも人を赦す者です。そして、後にパウロとバルナバが、この争いの後で和解したことが分かっています（第一コリント 9 章 6 節; ガラテヤ 2 章 1 節, 9 節; コロサイ 4 章 10 節参照）。また、パウロがマルコに対する考えを改めたことも分かっています。そのころまでに、マルコは自分が忠実な者であることを、しかも十分すぎるほどに証明していたのです。最終的にパウロは、後にペテロもそうしたように、マルコを福音のために役立つ同労者として非常に高く評価するようになり

ました。パウロはマルコを赦しただけでなく、自分がローマで投獄されていたときには、御言葉の奉仕を助けてもらうために、彼を呼び寄せようとさえしたのです。

> 私と共に囚われているアリスタルコが、あなたがたによろしくと言っている。バルナバのいとこであるマルコも同様である。（コロサイ 4 章 10 節 /NKJV 訳）

> 私と共にいるのはルカだけである。マルコを連れて来てほしい。彼は私の働きに役立つからである。（第二テモテ 4 章 11 節 /NKJV 訳）

> また、私の同労者であるマルコ、アリスタルコ、デマス、ルカも[あなたによろしくと言っている]。（ピレモン 1 章 24 節 /NKJV 訳）

マルコはパウロの死後もローマにとどまっていた可能性があります。そして、ペテロがローマに到着した後、そこで二人が旧交を温め、友情を新たにしたのかもしれません。マルコはパウロを助けたのと同じように、ペテロをも助けました。そして、この偉大な使徒から「息子」と呼ばれるほどの高い評価を得たのです（第一ペテロ 5 章 13 節後半）。

私たちの神は、赦しの神であり、贖いの神です。私たちは皆、この人生で過ちを犯します。時にはマルコの場合のように、その過ちが非常に大きく、霊的に立ち直ることなど、もはや不可能に思えることさえあります。しかし、ヨハネ・マルコのように、その後も正しいことを行うために忍耐強く歩み続けるなら、放蕩息子のたとえにあるように、恵み深い神が、私たちをご自身との愛に満ちた交わりへと再び迎え入れようと、忍耐強く待っていてくださることを知るでしょう。パウロはマルコを再び受け入れました。ペテロもまた彼を受け入れました。ヨハネ・マルコには、これまで生きた中でも最も偉大な信者の二人に、大いに仕え、祝福をもたらす機会が与えられたのです。ですから、彼が永遠に受ける報いも、それにふさわしく大きなものになると、確信をもって言うことができます。そして、それ以上のことさえあります。マルコには、聖霊の導きの下で、永遠に存続する神の御言葉の一部、すなわちマルコの福音書を書き記すという特権までもが与えられたのです。

愛の口づけ（14 節）：

> 互いにアガペーの愛の口づけをもって[私に代わって]挨拶しなさい。（第一ペテロ 5 章 14 節前半）

地中海沿岸の文化では、人々がこのように身体的な接触を伴う方法で気持ちを表すことは、ごく一般的です。しかし、こうした習慣は、たとえば今日のこの国では普通ではありません。挨拶として頬に口づけをすることが当時の習慣であったなら、それは何ら不適切なことではありませんし、信者たちが集まる国で握手が習慣となっているなら、代わりに握手をすることにも何の問題もありません。いずれにしても、ここでペテロがこのように命じているのは、自分が仕えてきた信者たち、すなわちこの手紙を受け取るすべての信者たちに対する、クリスチャンとしての愛を表すためにすぎないことを理解すべきです（つまり、彼らがこの手紙を読んだとき、実際にペテロの代わりに互いに口づけをすることを期待していたわけではありません）。

イエス・キリストを信じる者として、私たちは、互いに会ったことがあるかどうか、直接顔を合わせたことがあるかどうか、あるいは手紙や電子的な通信手段を通してしか交わる機会がなかったかどうかにかかわらず、イエス・キリストの花嫁の一員として互いに結ばれていることを喜び、その喜びを表すのは、正しくふさわしいことです。今日、私たちの間には何百、何千キロもの距離や、その他さまざまな隔たりがあるかもしれません。しかし、私たちには皆、聖霊が与えられており、また、真理に対して、そしてその真理を通してイエス・キリストの教会を拡大し、建て上げることに対して、同じ献身と熱意を持つべきなのです。さらに私たちは、やがて来るあの栄光の日に、復活した一つの教会として共に立つという、確かで揺るぎない希望を喜ぶこともできます。そのとき私たちは、主の御前の栄光に包まれながら、死から私たちを救い出してくださった愛する救い主への賛美を、完全な調和のうちに共に歌うのです。これこそが私たちすべてに与えられた受け継ぐべき財産であり、私たちは今も、そして永遠にわたっても、互いに結ばれた者であることを喜ぶのです。

> (15) 私たちは主ご自身の御言葉によって、あなたがたにこのことを告げる。主が来られる時（すなわち、大艱難期を終わらせる再臨）まで生き残っている私たちが、すでに眠りについた人々に先立つことは決してない。(16) なぜなら、主ご自身が、号令の叫びと、御使いのかしらの声、神のラッパの響きとともに、天から降って来られるからである。そして、キリストにあって死んだ人々が、まず[復活して]よみがえる。(17) それから、生き残っている私たちが、彼らと共に雲の中に引き上げられ、空中で主とお会いする。こうして、私たちはいつまでも主と共にいることになる。（第一テサロニケ 4 章 15-17 節）

イエス・キリストにある人々への平安（14 節）：

> キリスト・イエスにあるあなたがたすべてに、平安がありますように。アーメン。

（第一ペテロ 5 章 14 節後半）

これまで何度も述べてきたように、教会時代における第四の戒めの成就は、週に一日、律法に定められた儀式を守ることによって実現するのではなく、毎日、一日中、イエス・キリストの平安のうちに歩むことによって実現するのです。この平安は、私たちの生活と思考のあり方を支配するものでなければなりません。そして、それは聖霊によって力を与えられ、神の御言葉の真理によって強められるものです。私たちはその真理のうちに成長し、クリスチャンとしての歩みを一歩進めるごとに、その真理にますます注意を払うようになります。私たちが自分自身のわざをやめ、代わりに主に信頼するとき、すなわち、**私たち自身が**なすべきことには熱心に取り組みながら、主にしかできないことは主に委ねるとき、私たちはこの信仰の安息、この平安に入るのです。これこそが、この世で生きる一日一日を、イエス・キリストのために、主にささげられた聖なる安息日として守ることの真の成就なのです。

> それゆえ、神の**安息**に入るという約束がなお残されているのだから、あなたがたのうちのだれも、その安息に入れなくなることのないよう、恐れをもって注意しようではないか。（ヘブル 4 章 1 節 /NKJV 訳）

> (9) したがって、神の民のためには、なお**安息**（Sabbatismos＜サバティスモス＞、「安息日の休み」、Sabbath＜安息日＞に由来する）が残されている。(10) なぜなら、神の**安息**に入った者は、神がご自身のわざを休まれたように、自分自身も**自分のわざをやめて**休んでいるからである。(11) それゆえ、私たちはその**安息**に入るよう熱心に努めようではないか。だれも、あの不従順の同じ例にならって倒れることのないためである。（ヘブル 4 章 9-11 節 /NKJV 訳）

この「平安を基盤とする考え方」は、単に知的に理解するだけでなく、日々の生活の中で、一歩進むごとにますます強い信仰をもって主にしっかりとすがりつき、積極的に実践していくべきものです。そして、これは困難な試練や厳しい試みに耐え抜くために、絶対に欠かせないものです。このシリーズの序論で述べたように、ペテロがこの手紙を書いた主な目的は、不信者やローマ国家からの反対が強まる中でも、ローマ世界各地の信者たちが信仰に堅く立ち続けるよう励ますことでした。特に、不当に受ける苦しみをうまく乗り越えるために絶対に欠かせないのは、自分の思い煩いを主に委ねるという敬虔な習慣です（詩篇 55 篇 22 節; 第一ペテロ 5 章 7 節）。自分ではほとんど、あるいはまったくどうすることもできない患難から主が救い出してくださることを信頼し、自分自身のわざをやめるのです。これは、日々の糧を得るための努力をやめるという意味ではなく、ましてや霊的成長、霊的前進、霊的な実りを目指して努力し続けること

をやめるという意味でもありません。そうではなく、主にしか私たちを助けることができない状況で、自分の力によって自分自身を救い出そうとする、あらゆる努力をやめるということなのです。

この「信仰による安息」は、当時の信者たちがしっかりと身につける必要のあった、非常に重要な原則でした。そして、それは今日を含め、あらゆる時代の信者たちにとっても必要なものであり、間もなく訪れる艱難期には、何にもまして重要なものとなるでしょう。イエス・キリストに属する者として、主の花嫁、主の体、主の教会である者として、また主の直接的で愛に満ちた世話の下にある羊として、私たちには、いつでも主に信頼し、主が救い出してくださることに頼り、信仰によって主のうちに安息する権利があり、またそうする義務があります。……すなわち、この最後の節でペテロが私たちのために願っている平安を持つことです。これこそが、「キリスト・イエスにある」すべての人々に与えられた、受け継ぐべき財産なのです。

「わたしはあなたがたに**平安**を残す。わたしの**平安**をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものではない。」(ヨハネ 14 章 27 節)

(1) こうして、私たちは信仰によって義と認められたのだから、私たちの主イエス・キリストを通して、神[父]との**平和を**[すでに得ているのだから、それを]しっかりと保とうではないか。(2) 私たちはまた、この方を通して、今立っているこの恵みに入る道をも得たのであり、神の栄光にあずかる希望(すなわち、私たちの復活への期待)を誇ろうではないか。(ローマ 5 章 1-2 節)

(6) 何も思い煩ってはならない。むしろ、あらゆることにおいて、感謝をもって祈りと願いをささげ、あなたがたの求めることを神に知らせなさい。(7) そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、キリスト・イエスにあって、あなたがたの心と思いを守ってくださる。(ピリピ 4 章 6-7 節 /NKJV 訳)

あなたは、その思いをあなたに堅く向けている者を、**完全な平安**のうちに。その者があなたに**信頼して**いるからである。(イザヤ 26 章 3 節 /NKJV 訳)